

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第128集

野口 I 遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業岩手地区関連遺跡発掘調査

(財) 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

野口 I 遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業岩手地区関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,300箇所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う交通網の整備も重要な一施策であります。岩手地区の広域営農団地整備計画に基づく基幹農道整備事業は、農産物流通市場の拡大や農産物取引の規格化、大量化等の情勢に対応する事業として多方面からの期待を担うものであります。

このような埋蔵文化財の保護と開発との調和ある施策も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

岩手地区の広域営農団地農道整備事業に関連する遺跡は、昭和57年以降6遺跡の発掘調査を終了し、5遺跡の発掘調査報告書を刊行しております。本報告の野口Ⅰ遺跡は、西根町北東部の丘陵地に立地し、昭和62年の発掘調査によって若干の縄文時代の遺構と遺物が発見されました。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました岩手北部土地改良事業所、西根町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

昭和63年4月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 中村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県岩手郡西根町寺田第22地割27ほかに所在する野口Ⅰ遺跡の調査結果を収録したものである。本遺跡の岩手県遺跡台帳番号はK E 05-0383である。
2. 本遺跡の調査は、岩手地区広域営農団地農道整備事業に伴う緊急発掘調査であり、岩手県農政部農地建設課および岩手県北部土地改良事業所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 野外調査は昭和62年4月7日から5月31日まで、室内整理は同11月4日から11月30日まで実施した。
4. 発掘対象面積および発掘調査面積は3,700㎡である。
5. 発掘調査は玉川英喜・中川重紀が担当し、室内整理および報告書作成は玉川英喜が担当した。
6. 野外調査および室内整理において、以下の機関から御協力をいただいた。

岩手県北部土地改良事業所
西根町教育委員会
7. 分析・鑑定は、次の方々に依頼した。(敬称略)

火山灰 奈良教育大学 三辻利一
石質鑑定 佐藤地質工学研究所 佐藤二郎
8. 野外調査の作業には西根町寺田、帷子、上関の方々から御協力をいただいた。
9. 発掘調査の諸記録と遺物は、調査遺跡略号N G I-87を付して岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序

例言

I 調査に至る経過	2	1. 野外調査	11
II 立地と環境	3	2. 室内整理と報告書	12
1. 位置と地形	3	IV 検出された遺構と遺物	15
2. 遺跡付近の地形	3	1. 遺構と遺構内の出土遺物	15
3. 基本層序	7	2. 遺構外の出土遺物	18
4. 周辺の遺跡	7	V まとめ	28
III 調査の方法	11		

図版目次

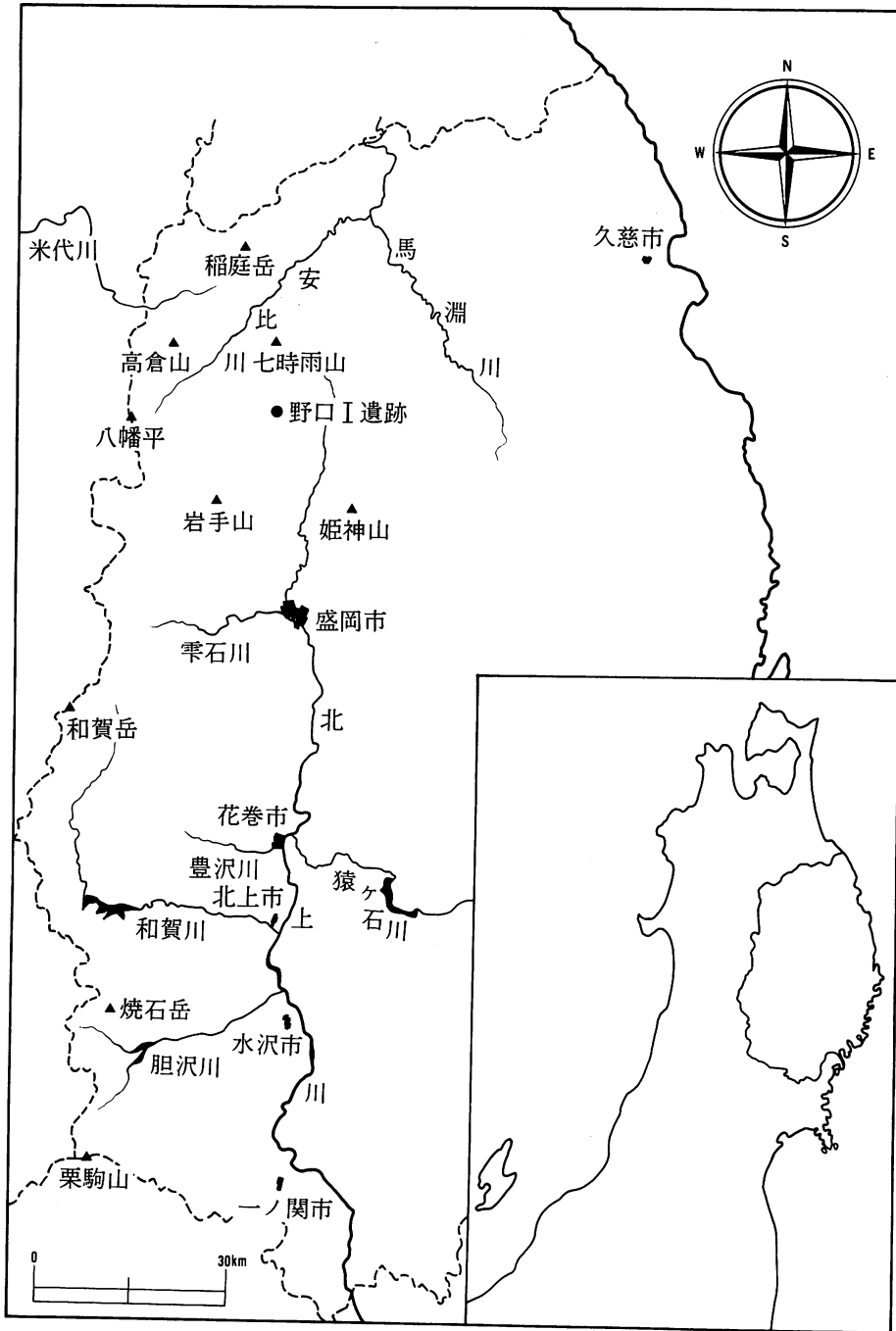
第1図 遺跡位置図	1	第9図 ピット	16
第2図 農道と遺跡位置図	2	第10図 焼土	17
第3図 地形分類図	4	第11図 遺構外出土遺物 土器(1)	20
第4図 調査区周辺の地形図		第12図 遺構外出土遺物 土器(2)	21
グリッド配置図	5	第13図 遺構外出土遺物 土器(3)	22
第5図 土層柱状図	7	第14図 遺構外出土遺物 石器(1)	24
第6図 周辺の遺跡位置図	8	第15図 遺構外出土遺物 石器(2)	25
第7図 遺構配置図	13	第16図 遺構外出土遺物 石器(3)	26
第8図 住居状竪穴遺構	15		

表目次

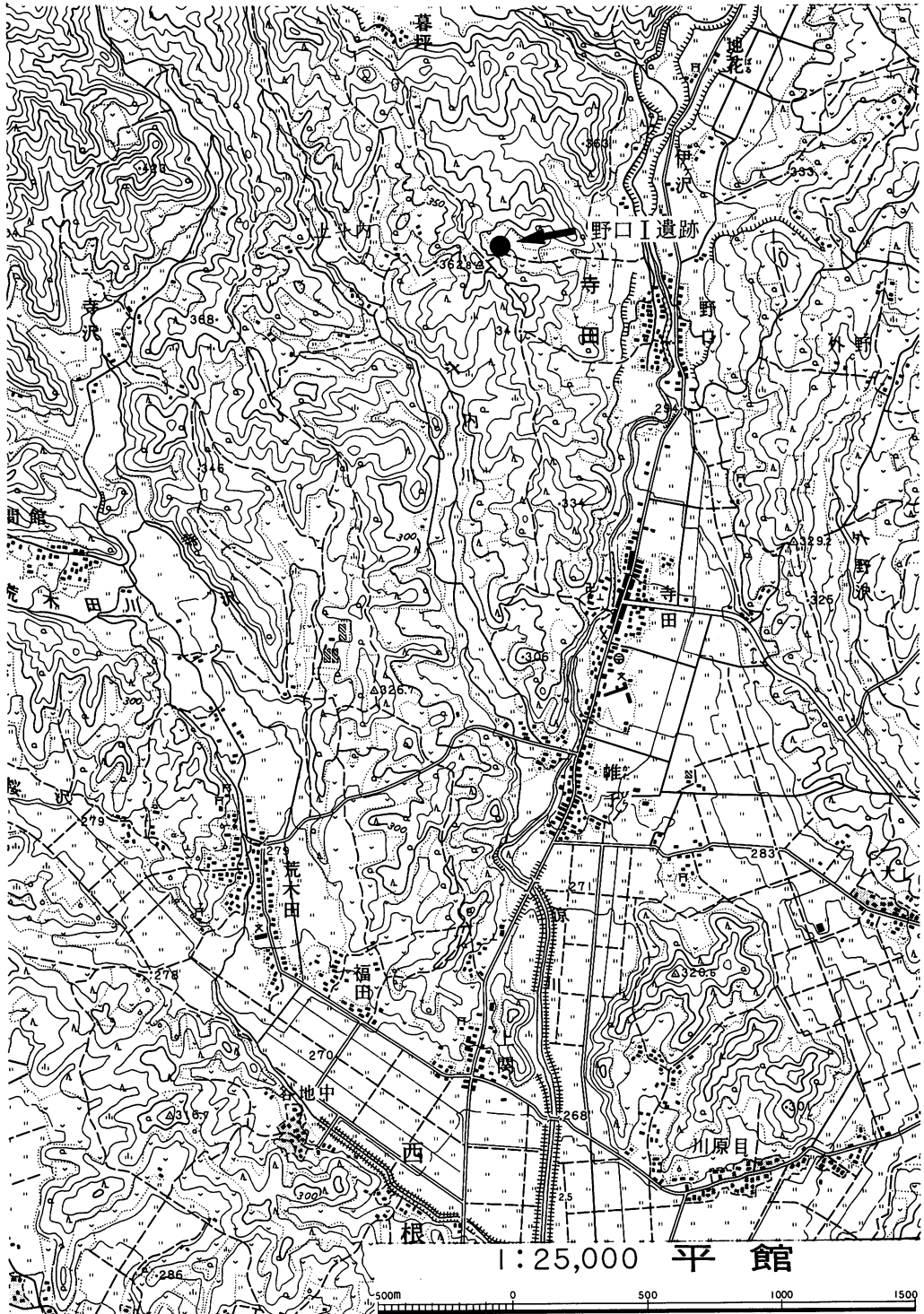
第1表 周辺の遺跡一覧表	9	第2表 石器計測一覧表	27
--------------	---	-------------	----

写真図版目次

PL-1 遺跡近景・遠景	31	PL-5 遺構内・遺構外出土遺物 土器(1)	35
PL-2 作業風景	32	PL-6 遺構外出土遺物 土器(2)	36
PL-3 遺構(1)	33	PL-7 遺構外出土遺物 石器(1)	37
PL-4 遺構(2)・基本層序	34	PL-8 遺構外出土遺物 石器(2)	38



岩手県全体図



第1図 遺跡位置図

I 調査に至る経過

岩手地区の広域営農団地農道整備事業は、昭和52年に策定された岩手地域広域営農団地整備計画に基づく団地内農道網の骨格となる基幹農道の整備であり、岩手町の国道4号沼宮内バイパスから松尾村の国道282号に至る延長20.04km、幅員8mの農道である。

これに関連する埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、昭和54年度から県農政部農地開発課と県教育委員会文化課との間で協議された。県教育委員会文化課は昭和55年6月に農道の計画路線に沿った分布調査を実施し、岩手町に25遺跡、西根町に14遺跡、松尾村に4遺跡が確認された。この結果をもとに路線や工法の変更についてさらに両者間で協議が重ねられ、止むを得ず破壊される遺跡については事前の発掘調査を実施することとした。

これにより、昭和57年に西根町の上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡、昭和58年に岩手町の黄金堂遺跡、昭和59年には西根町の荒木田Ⅱ遺跡の発掘調査が実施された。

野口Ⅰ遺跡については、昭和61年8月20日付けの「教文第291号」による県教育委員会文化課長から岩手北部土地改良事業所長あての「昭和62年度における埋蔵文化財関連土木工事等の調査について」照会し、昭和61年9月17日付けの「岩土地第244号」による回答をうけて、同11月7・8日県教育委員会文化課による現地確認調査が行われた。さらに県教育委員会文化課は調整のうえ、野口Ⅱ遺跡の調査を昭和62年度における県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査事業に編入し、昭和62年4月1日付け委託契約により着手することとなった。



第2図 農道と遺跡位置図

II 立地と環境

1. 位置と地形

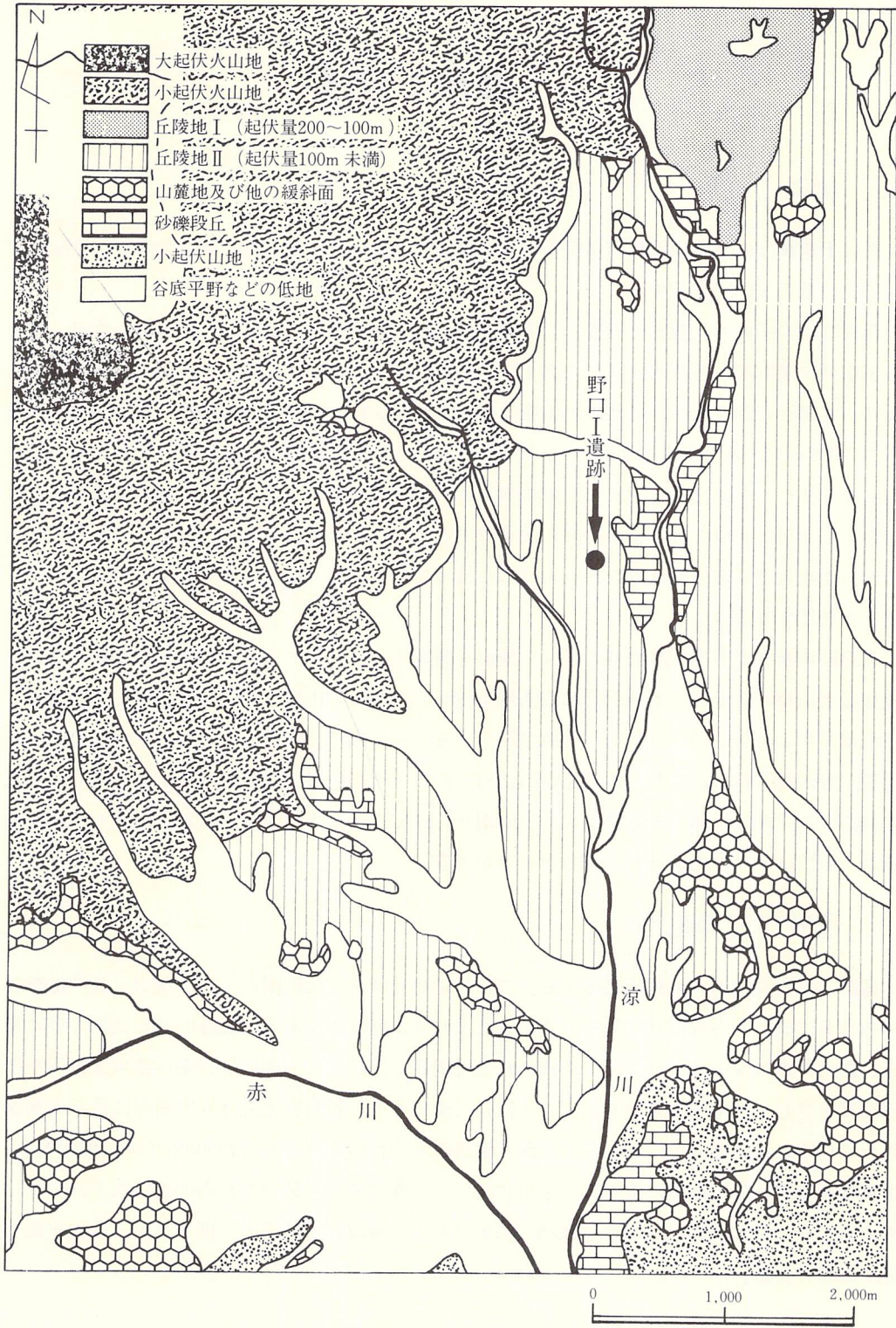
野口 I 遺跡は岩手県岩手郡西根町寺田第22地割27ほかに所在し、東日本旅客鉄道花輪線平館駅の北々東約5 kmに位置する。

西根町は岩手県の北西部に位置し、北側を一戸町・浄法寺町・安代町、東側を岩手町、南側を玉山村・滝沢村、西側を松尾村に囲まれている。東には北上川上流域を挟んで北上山地が連なり、北側から西側にかけては奥羽山脈に連なる西岳(1,018m)・七時雨山(1,060m)・御月山(954m)・岩手山(2,041m)などが取り巻いている。町内を流れる河川はこれらの山並みに源を發し、北部では南流または南東流する沢や河川がやがて北上川上流域の支流である一方井川や赤川に収束される。中央部では東流する小河川が赤川に合流し、南部では北上川支流の松川に収束される。低地はこれらの河川に沿って形成され、松川・赤川・涼川沿いには河岸段丘が發達する。

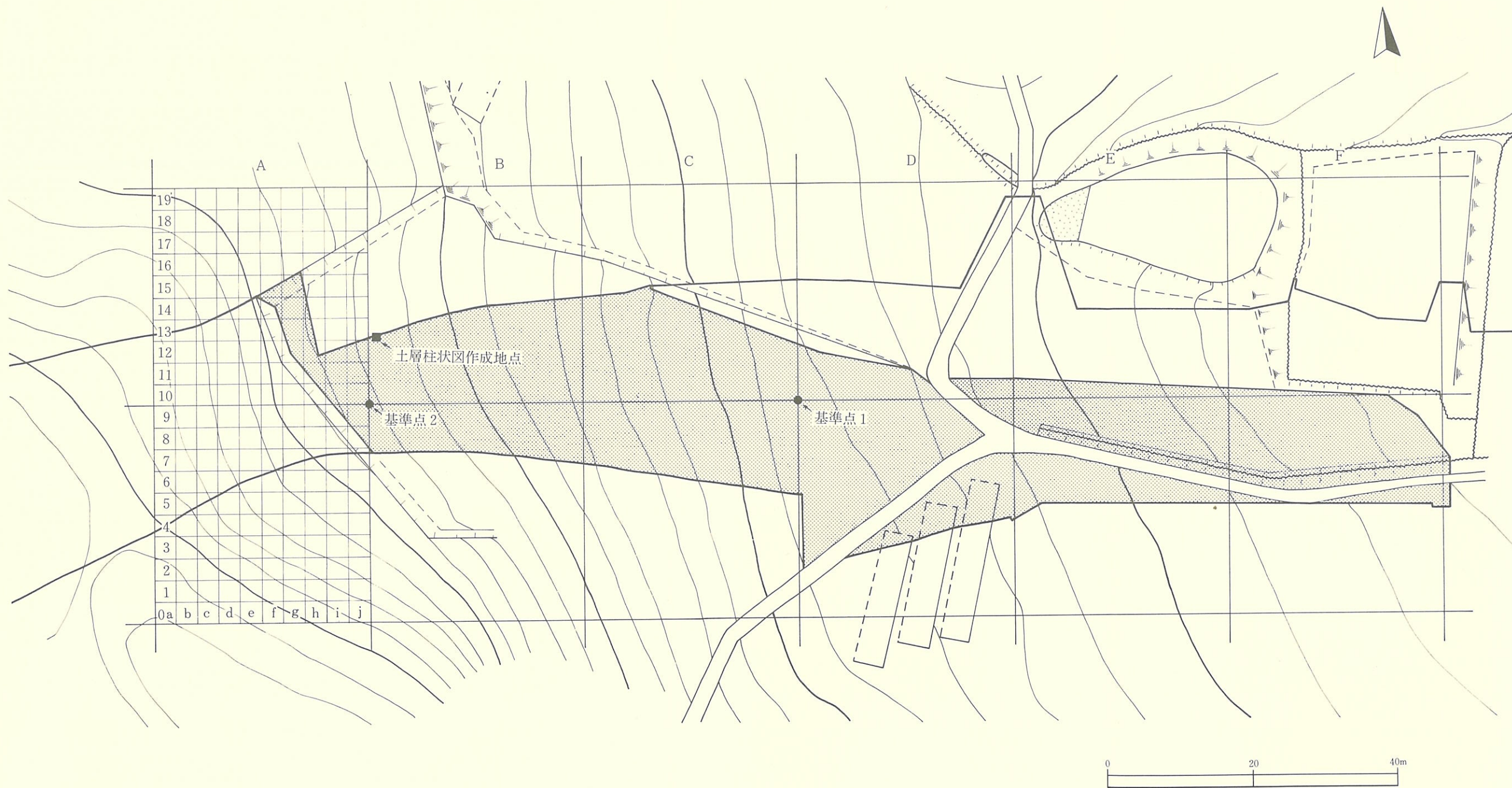
当遺跡の所在する西根町北部に限って地形を概観すると(第3図)、北西部には御月山から連なる火山地が広がり、その裾部に丘陵地が続く。これらの山地・丘陵地を開析して南流または南東流する河川に沿って低地が形成されている。特に赤川と涼川の合流する平館付近は広い氾濫平野が見られる。また、涼川沿いの新田・野口・堀切付近では河岸段丘が發達する。図幅南側には孤立的な山体である野駄森や白屋山から続く小起伏山地が見られる。山地・丘陵地と低地の間には所々に山麓地及び緩斜面が分布する。

2. 遺跡付近の地形

遺跡は涼川右岸の丘陵地に立地する。この付近の丘陵地は七時雨山・二ツ森山・御月山などの連なる尾根筋から放射状に走る水系にきざまれる山麓丘陵である。遺跡の載る丘陵も東に涼川、西に斗内川が南流し、両河川に挟まれて尾根筋はほぼ南北方向に延びる。涼川は田代平高原に源を發し、七時雨山東麓を巻くようにして南流する。野口付近では左右両岸に段丘が形成されている。遺跡は右岸段丘のさらに西、涼川からの直線距離にして約500mの所に位置する。遺跡は西側を丘陵尾根筋に限られ、涼川に向かって開けるすり鉢状の東向き緩斜面上にのる。標高は335~345m、涼川との比高は35~45mである。現況は遺跡内の一部を町道・農道が走り、他は畑地である。



第3図 地形分類図



第4図 調査区周辺地形図・グリッド配置図

3. 基本層序

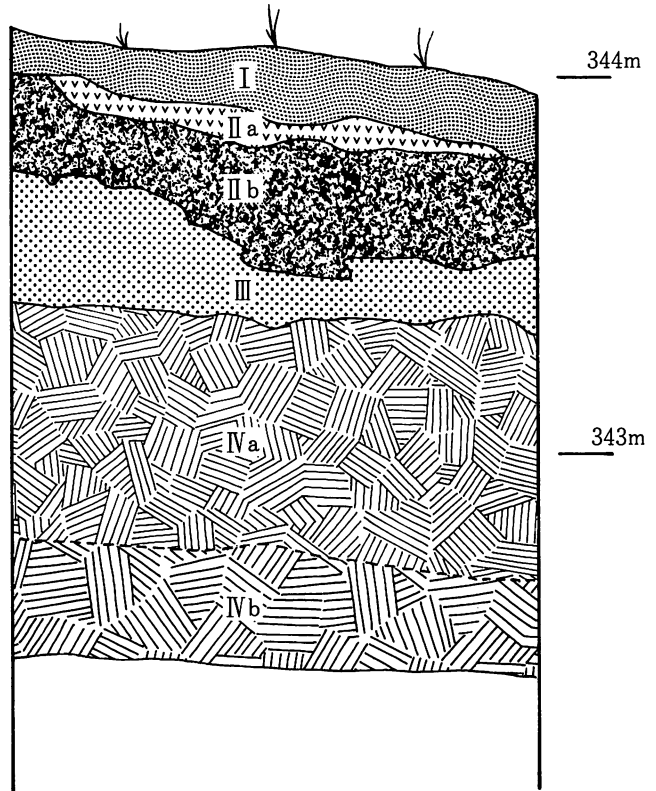
土層柱状図はグリッド B a 13の地点で作成した。各層の概略は以下のとおりである。

I 層 黒褐色土 (10 Y R 2/2) 表土で遺跡全面をおおう。層厚は20cm前後で、現況が畑地のため耕作によって柔らかくくたかれた締りの弱いシルト質土である。なお、C・D区には厚い所で50cmを越す盛土が堆積している。この盛土は斜面上部部のA・B区に地山面を削剝した状況が認められるので、削り出して斜面下方部に盛ったものと思われる。A・B区での遺物は表土層からのものが多い。

II 層 黒色土 (10 Y R 2/1) 2層に細分される。上部の a 層は灰黄色 (乾燥状態では灰白色) 浮石を含む。この浮石は調査区内では凹地に部分的に堆積する。下部の b 層には浮石が含まれない。B・C区やE・F区ではこの層を欠く所がある。層厚は20~30cmほどであるが、沢筋部分では40cmを越える所がある。D・E・F区の遺物は主にこの層から出土する。

III 層 暗褐色土 (10 Y R 3/3~3/4) 色調は下部ほど明色となる。若干粘性のあるシルト質土で、IV層土が漸移的に変化した様相を示す。層厚は20cm前後であるが、B・C区ではこの層を欠く所がある。この層からの出土遺物は少ない。

IV 層 黄褐色土 (10 Y R 5/6~5/8) 所謂地山である。粘質土で、下部に小礫を含む層がある。遺物は含まれていない。

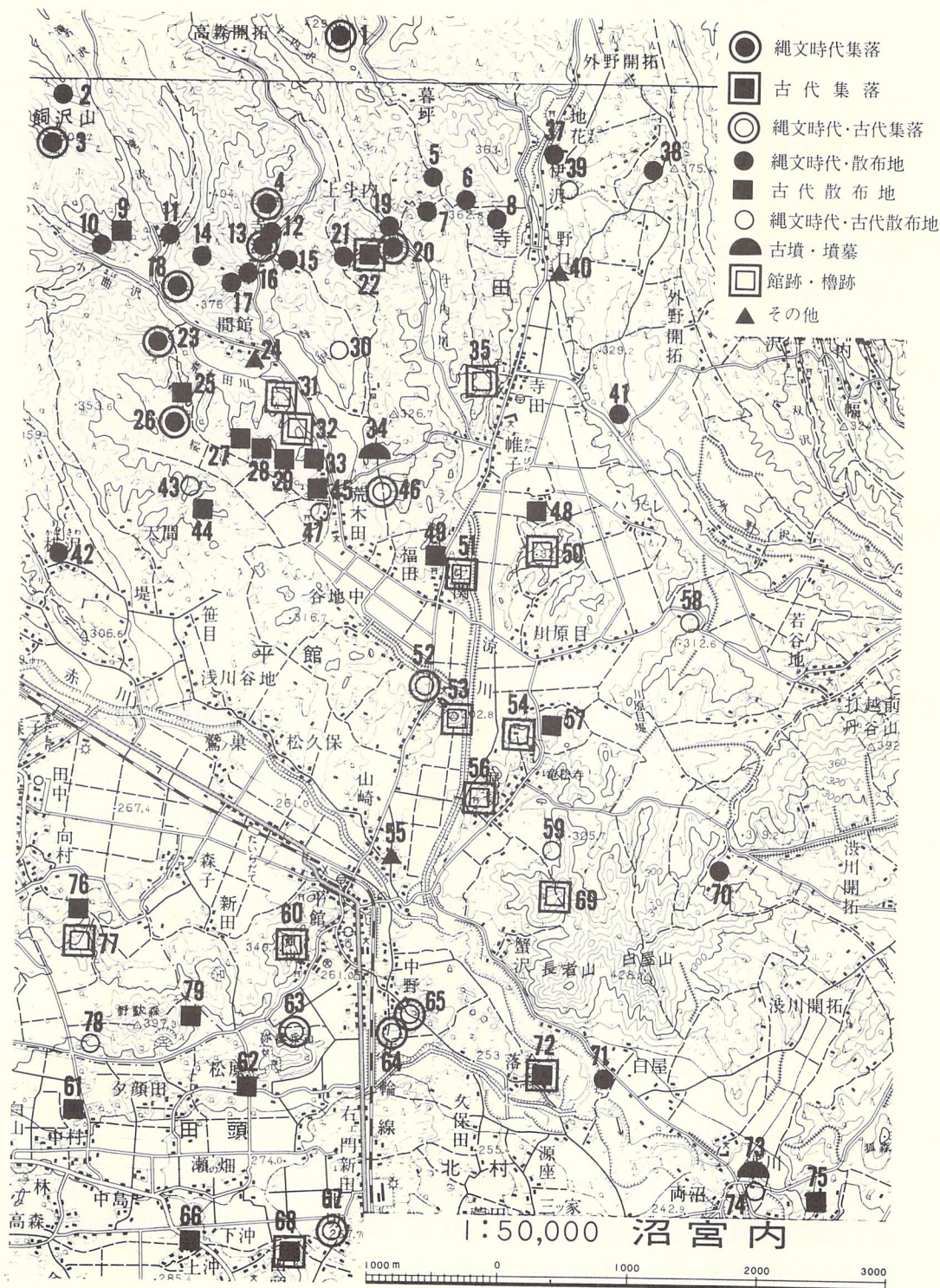


第5図 土層柱状図

4. 周辺の遺跡

西根町には遺跡台帳に140箇所の遺跡が登載されている。第6図には当遺跡を中心とする周辺の79箇所(松尾村のもの4箇所を含む)を示した。図示した遺跡の時代別・種類別の内訳は下表のとおりである。分類は遺跡台帳によっている。

縄文時代		古代		縄文時代・弥生時代・古代		古墳 墳墓	館跡 櫓跡	その他
集落	散布地	集落	散布地	集落	散布地			
8	20	3	17	6	8	2	12	3



第6図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	備考	番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	備考
1	暮坪高地集落	集落跡	縄文(中期)土器、木炭	寺田暮坪		41	寺田	散布地	尖先土器(早期)	寺田第8地割	
2	滝ノ沢	散布地	縄文(中期)土器	荒木田間館		42	椎ノ沢	散布地	縄文土器	平館椎沢	
3	子飼地集落	集落跡	縄文(中期)土器	荒木田間館		43	荒木田Ⅲ	散布地	土器	荒木田	
4	寺田暮坪Ⅱ	集落跡	縄文(晩期)土器	荒木田1		44	荒木田Ⅳ	散布地	土師器	荒木田	
5	寺田暮坪	散布地	縄文片	寺田暮坪、野口		45	堂後Ⅱ	散布地	土師器	荒木田4-5-2	
6	野口Ⅰ	散布地	縄文片	寺田暮坪、野口		46	福田	集落跡	縄文土器、土師器	荒木田福田	
7	上斗内Ⅱ	散布地	縄文片	寺田暮坪、上斗内		47	堂後Ⅰ	散布地	須恵器、縄文中期	荒木田第3地割	
8	野口Ⅱ	散布地	縄文片	寺田暮坪、野口		48	春宮田	散布地	土師器	椎子、春宮田	
9	小曲沢Ⅰ	散布地	土師器	荒木田14		49	上関	散布地	土師器、須恵器	上関第4地割	
10	小曲沢Ⅱ	散布地	縄文(後期)土器	荒木田14-59		50	赤間館	館跡		寺田	
11	長渡沢	散布地	縄文(晩期)土器	荒木田14-61-1		51	上関館	館跡		寺田	
12	寺沢Ⅲ	散布地	縄文土器	荒木田1-61		52	山崎野	集落跡		山崎	
13	寺沢Ⅰ	集落跡	縄文(晩期)土器	荒木田第1地割寺沢		53	向館	館跡		山崎	
14	寺沢Ⅳ	散布地	縄文土器	荒木田2-79		54	堀切館	館跡		堀切	
15	寺沢Ⅴ	散布地	縄文土器	荒木田1-60		55	山崎一里塚	一里塚		平館第8地割堀切	
16	寺沢Ⅵ	散布地	縄文(後期)土器	荒木田2-11-1		56	堀切えぞ館	館跡	縄文土器	平館堀切	
17	寺沢Ⅶ	散布地	縄文土器	荒木田2-82		57	川原目向い	散布地	土師器、須恵器	椎子、川原目	
18	間館Ⅱ	集落跡	縄文(中期)土器	荒木田2-64-13		58	川原目湧口	散布地	土器、後期、晩期、土師器	椎子、川原目	
19	上斗内Ⅰ	散布地	縄文土器	寺田上斗内		59	稲荷	散布地	土器、晩期土師	平館第5地割堀切	
20	上斗内Ⅲ	集落跡	縄文片	寺田暮坪上斗内		60	平館	館跡		平館	
21	上斗内Ⅳ	散布地	縄文片	寺田暮坪上斗内		61	中村	散布地	土師器	田頭第13地割中村	
22	上斗内Ⅴ	集落跡	縄文片、土師器	寺田暮坪上斗内		62	間羽松	散布地	土師器	田頭第33地割	
23	間館Ⅰ	集落跡	縄文(中期)土器	荒木田		63	大久保	集落跡	縄文土器、土師器	平館大久保	
24	治佐衛門屋敷跡	屋敷跡		荒木田		64	東部落	集落跡	土器、弥生(?)土師器	平館東部落	
25	桜井Ⅰ	散布地	土師器	荒木田4		65	東部落Ⅱ	集落跡	土器、弥生(?)	平館東部落	
26	桜井Ⅱ	集落跡	縄文(前期-後期)土器	荒木田3		66	館腰Ⅰ	散布地	土師器	田頭第26地割	
27	桜井Ⅲ	散布地	土師器	荒木田14		67	北切	集落跡	縄文土器、土師器	大更北切	
28	桜井Ⅳ	散布地	土師器	荒木田14		68	谷田森	集落跡	土師器	田頭館腰	
29	荒木田Ⅰ	散布地	土師器	荒木田		69	稲荷山館	館跡		蟹沢	
30	荒木田Ⅱ	散布地	縄文、土師器	荒木田		70	堀切	散布地	縄文(晩期)土器	平館堀切	
31	荒木田館	館跡		荒木田		71	白屋	散布地	縄文土器	大更白屋	
32	荒木田櫓跡	櫓跡		荒木田		72	落合	集落跡	土師器	平館落合	
33	堂後Ⅲ	散布地	土師器	荒木田		73	谷助平古墳	古墳	須恵器、土師器、直刀、鉄鏃、鉄輪、琥珀玉	大更波川	壊滅
34	九ツ森墳	墳		荒木田第7地割		74	波川えぞ館	散布地		大更波川	
35	寺田館跡	館跡		寺田		75	波川	散布地	土師器	大更波川	
36	下斗内館	館跡	土塁			76	野駄	散布地	土師器	大字野駄第27地割字館	
37	荻前	散布地	縄文(前期)土器コップ型	寺田荻前		77	野駄館	館跡		大字野駄第27地割字館	
38	野口Ⅲ	散布地	縄文片	寺田野口		78	館Ⅰ	散布地		大字野駄第27地割字館	
39	野口Ⅳ	散布地	縄文片、土師器	寺田野口		79	館Ⅱ	散布地	土師器	大字野駄第27地割字館	
40	野口五輪塔	祭祀跡		寺田野口							

図示した周辺の遺跡のあり方で、大まかな特徴として次のような傾向が見られる。縄文時代の遺跡は概ね北西部の山麓地・丘陵地の標高300m以上の地に多く、古代の遺跡は涼川支流の桜沢や赤川・根別川沿いの標高300m以下の地に多い。縄文時代の遺跡の立地については高橋昭治氏が、北上川上流域では標高300m以上が縄文文化生活圏という試論を提示している。中世以降の遺跡では館跡が多いが、大部分は旧津軽街道沿いに見られる。

町内でこれまで発掘調査が行われた遺跡として、最近では上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡：荒木田Ⅱ遺跡などがあり、古くは1960年の草間俊一氏による谷助平古墳がある。上斗内Ⅲ遺跡からは縄文時代後期に属する住居址7棟のほかピットや焼土などが検出され多くの遺物が出土している。上斗内Ⅳ遺跡から住居址は検出されず、上斗内Ⅴ遺跡では奈良時代と推定される住居址1棟が検出されている。荒木田Ⅱ遺跡では陥し穴状遺構などが検出され、縄文時代後・晩期の土器片などが出土している。谷助平古墳では2基の古墳調査が行われている。径10m内外の小円墳で、須恵器・土師器・直刀・鉄鏃・琥珀の玉などが出土している。現在この古墳は壊滅している。

また、発掘調査されたものではないが、大正年間に小田島祿郎氏の踏査によるものとして、寺田村暮坪竪穴群と寺田村九ッ森古墳群（現在九ッ森遺跡一墳墓として登録）が史跡名勝天然記念物調査報告（第4号・第6号）に掲載されている。

註） 奈良教育大学の三辻利一氏の蛍光X線分析による鑑定の結果、十和田a降下火山灰と推定されている。なお、各因子の分析値は次のとおりである。

K-0.284 C a -1.34 F e -1.80 R b -0.162 S r -1.19

III 調査の方法

1. 野外調査

(1) 調査区の設定

調査範囲は道路建設予定地に沿って東西に細長く広がり、その幅は15～30m、長さ160m余りである。グリッドは道路中心杭No.130とNo.133に近接する任意の2点を設定し、それぞれ基準点1・基準点2として、その2点を結ぶ直線を軸線とした。基準点1を基点に30m毎に軸線に直交する線で区切り、大区画とした。大区画をさらに3mメッシュで区切り、小区画とした。グリッドの名称は大区画が西から東へA区・B区…とし、小区画が西から東へa～g、南から北へ0～19を与え（第4図）、大区画名と組み合わせてAa0・Ce10などのように呼称した。

基準点1・2の平面直角座標第X系による成果値、および杭高（L）は以下のとおりである。

基準点1 $X = -925,486\text{m}$ $Y = 23,384,769\text{m}$ $L = 336,727\text{m}$

基準点2 $X = -928,954\text{m}$ $Y = 23,325,011\text{m}$ $L = 345,246\text{m}$

(2) 粗掘り、遺構検出

当初、2m幅のトレンチを軸線に沿ったものと、軸線に直交するものを大区画毎に入れ、土層や旧地形、遺物の広がり等を把握した。C区・D区には一部に層厚50cm以上の盛土があったことやE区・F区・B区の一部の表土からは遺物が出土しなかったことから、それらの区域は重機で粗掘りした。重機による粗掘り後、若干の遺物が出土する表土下位の黒色土層は人力によった。粗掘り後、A区とC区で若干の遺構が検出された。遺構名は種別毎に西側のものから番号を与え、1号ピット・1号焼土などのように呼称した。住居状竖穴遺構は1棟であり番号は与えていない。

(3) 遺構の精査、出土遺物の取り上げ

住居状竖穴遺構は土層観察用のベルトを残して掘り進め、ピットは2分法で行った。精査の各段階で、図面の作成・写真撮影等必要な記録をとった。遺物は1号ピットと1号焼土から出土した土器以外はすべて粗掘り中のものであり、層位を確認して小グリッド単位で取り上げた。

(4) 実測と写真

平面実測はグリッド軸に合わせた1mメッシュを基本とする簡易遣り方測量法で行った。ライン名はDa9の北西端（基準点1）を座標原点とし、北方向をN1…、南をS1…、東をE1…、西をW1…とした。断面図は任意の高さで水平水糸を張り、作成した。縮尺率はいずれも20分の1である。写真撮影には6×7cm判モノクロ1台、35mm判のモノクロとカラーズライ

ド各1台を使用した。

2. 室内整理と報告書の作成

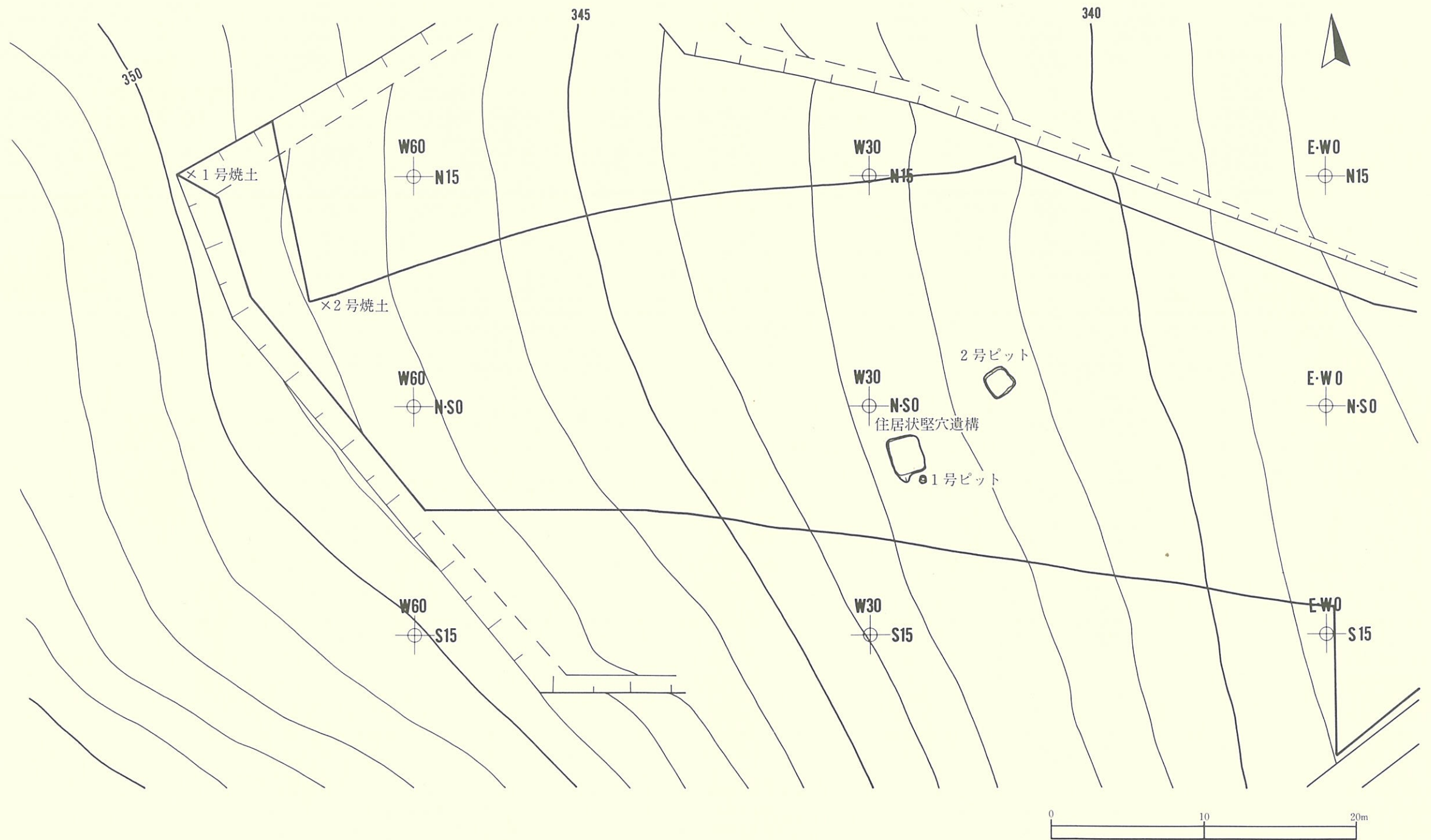
整理作業は遺構実測図の点検、合成、トレース、遺物の仕分け、登録、実測、トレース、図版作成の順に進めた。

(1) 遺構関係

遺構図版は現地で作成した実測図をもとにトレースし、掲載した。図版の縮尺は遺構配置図が300分の1、個々の遺構図版は30分の1である。写真図版の縮尺は不定である。基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層名はアラビア数字で表わしている。

(2) 遺物関係

出土遺物は野外調査時に水洗・注記をすませ、室内整理では種類別の仕分け、接合、復元を行った。出土した土器はすべて破片で、完形品はなく、復元実測可能なものは数点である。本報告では復元個体のほかに代表的な破片を選択して掲載している。石器は剥片石器・礫石器合せて26点出土し、そのすべてを掲載している。各図版の縮尺は復元土器1/3、拓本土器1/2、剥片石器1/2、礫石器1/3、写真図版の縮尺はそれぞれ1/4、1/2、2/3、1/3である。



第7図 遺構配置図

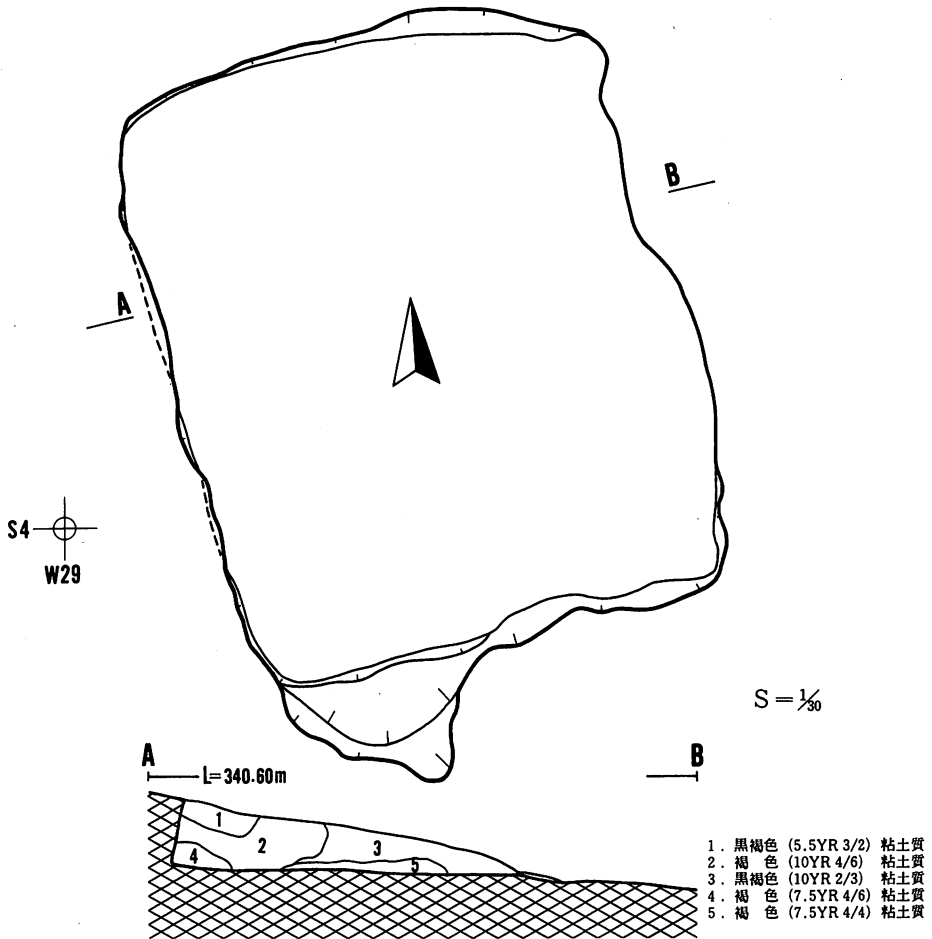
IV 検出された遺構と遺物

検出された遺構は住居状竪穴遺構1棟、ピット2基、焼土遺構2基である。いずれも調査区中央西側のA区・C区から検出されている。遺構内出土遺物は1号ピットと1号焼土からの土器片が各1点計2点の出土である。遺構外から出土した遺物は縄文時代の土器片と石器である。土器は数点の復元個体の他は破片で、総量はコンテナ1箱、石器は石鏃等の剥片石器11点と凹石等の礫石器15点の計26点が出土している。

1. 遺構と遺構内出土遺物

住居状竪穴遺構（第8図、PL-3）

グリッドCa8・Ca9付近の東向き緩斜面上に位置する。付近は基本層序II・III層を欠き、IV層上面が検出面である。平面形は長方形を呈し、規模は2.6×2.0mである。壁高は斜面上部



第8図 住居状竪穴遺構

の西側で25cm、斜面下方部の東側は削剥されて残存していない。壁は一部で若干オーバーハングする他はほぼ直立する。底面は平坦で、炉跡や柱穴はない。

埋土は上部がⅣ層起源の黄褐色土と暗褐色土・黒褐色との混土、下部が褐色を呈する汚れたⅣ層起源の土である。5層に分けているが、各層とも締りがよく非常に堅い。

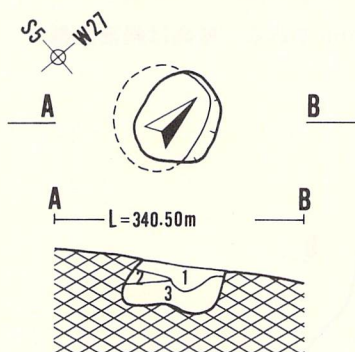
出土遺物はなく、時代や性格は不明である。

1号ピット

遺構（第9図、P L-3）

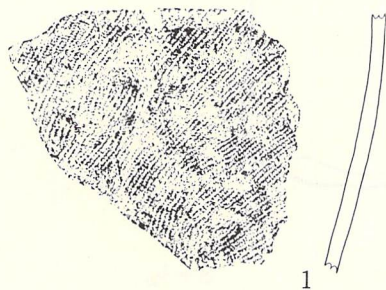
住居状堅穴遺構の南壁から30cmに位置し、検出面も同一面である。平面形は円形を呈し、規模は径約35cm、深さ約18cmと小さい。壁は西側がオーバーハングし、東側はほぼ直立する。底部が開口部より若干ふくらむ。

埋土は3層に分けられ、黒褐色土が卓越する。

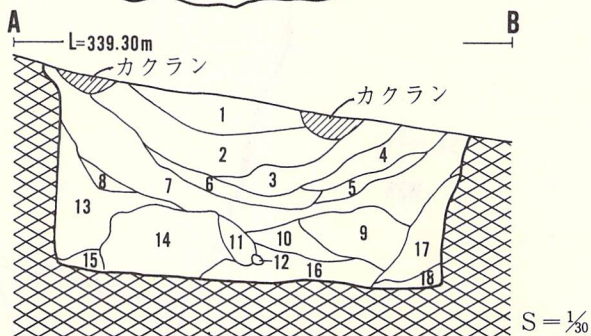
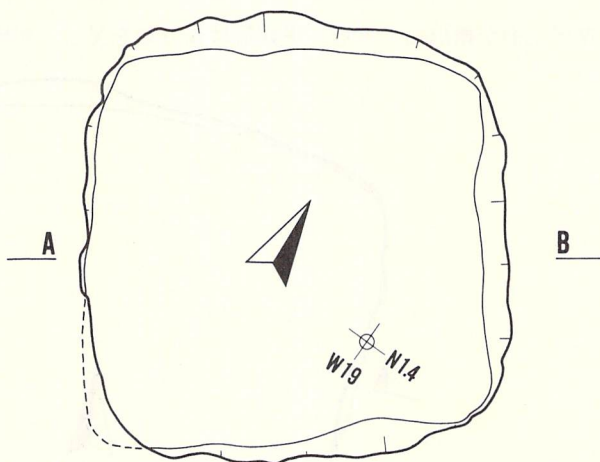


1. 黒褐色 (10YR 2/2) シルト質 炭化物粒を含む
2. 黒褐色 (10YR 2/2) 土と明褐色 (10YR 5/6~5/8) 土の混土
3. 黒褐色 (10YR 2/2~3/2) シルト質

1号ピット



1号ピット出土遺物(S=1/3)



2号ピット

- | | |
|--|----------------------|
| 1. 黒色 (10YR 2/1) | シルト質 |
| 2. 黒褐色 (10YR 2/2) | シルト質 灰白色浮石を含む |
| 3. 褐色 (10YR 4/4~4/6) | 粘土質 灰白色浮石を含む |
| 4. 褐色 (10YR 4/4) | 粘土質 |
| 5. 褐色 (7.5YR 4/4) | 粘土質 |
| 6. 黒褐色 (10YR 2/2) | シルト質 灰白色浮石を含む |
| 7. 黒褐色~暗褐色 (10YR 2/2~3/3) | 灰白色浮石を含む |
| 8. 黒褐色 (7.5YR 2/2) | シルト質 |
| 9. 褐色 (10YR 4/6) 土と暗褐色 (10YR 3/3) 土の混土 | |
| 10. 暗褐色 (10YR 3/3) | シルト質 灰白色浮石を含む |
| 11. 黒褐色 (10YR 2/2) | シルト質 |
| 12. にぶい黄褐色 (10YR 5/5) | シルト質 乾燥状態では灰白色 |
| 13. 暗褐色 (10YR 3/3) 土と黒褐色 (10YR 2/2) 土の混土 | |
| 14. 褐色 (10YR 4/6) 土と暗褐色 (10YR 3/3) 土・黒褐色 (10YR 2/2) 土の混土 | |
| 15. 黒色 (10YR 2/1) 土と黒褐色 (10YR 2/2) 土の混土 | |
| 16. 黒褐色 (10YR 2/3) | シルト質 炭化物を含む 灰白色浮石を含む |
| 17. 暗褐色 (7.5YR 3/3) | シルト質 |
| 18. 黒褐色 (10YR 3/2) | シルト質 |

第9図 ピット

遺物(第9図、PL-5)

埋土中から縄文時代晩期の粗製深鉢の体部破片が出土している。撚りの細かいLLRの直前段反撚で施文されている。表面の一部に煤が付着する。

2号ピット

遺構(第9図、PL-4)

住居状竪穴遺構の北東6mに位置し、検出面も同様である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約1.7m、深さ約80cmである。底面は平坦で、締りがよく、非常に堅い。壁は直立し、開口部付近で若干外傾する。

埋土は18層に分けられる。上部中央付近は黒色土・黒褐色土が卓越し、下部壁寄りには混土が多い。第13層・17層は褐色土と黒褐色土が互層ないしは互層状に堆積する。底面直上には焼土や炭化物が比較的多く混在する。

出土遺物はなく、時代は不明である。

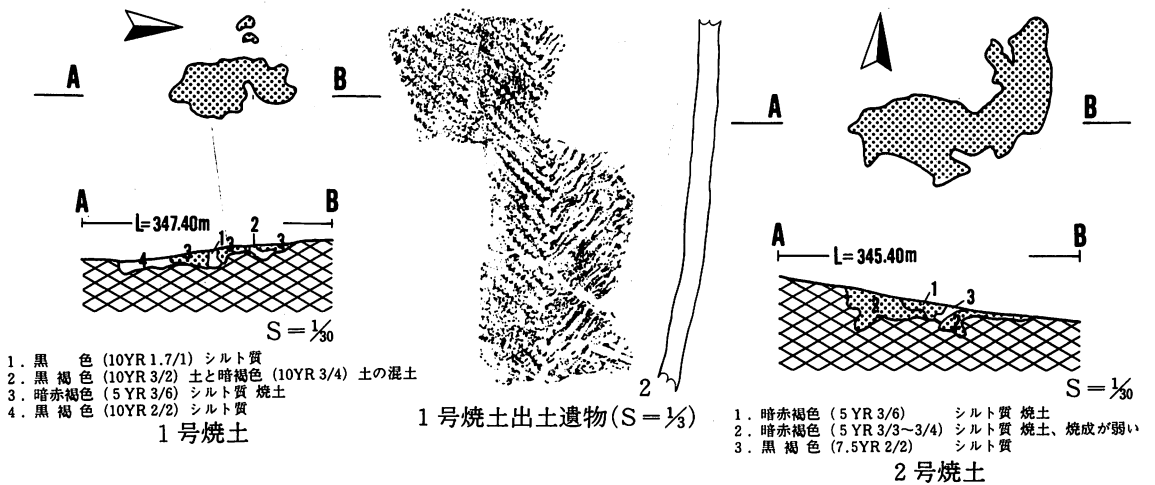
1号焼土

遺構(第10図、PL-4)

調査区北西端のグリッドAf15付近に位置する。焼土は東西40cm・南北50cmの範囲に不整形に広がり、層厚は5~10cmである。III層土が焼成を受けて形成されたもので、その上位にも焼土粒や炭化物が散在する。焼土は調査区外にも広がると思われる。

遺物(第10図、PL-5)

焼土中から深鉢の体部破片が出土している。地文は縦位の結束第1種羽状縄文が施されている。胎土には繊維が混入されている。



第10図 焼土

2号焼土

遺構(第10図、PL-4)

1号焼土の南東12.3mに位置する。焼土は東西80cm・南北70cmの範囲に不整形に広がる。最大層厚は10cmで、焼成はそれ程強くない。Ⅲ層土が焼成を受けて形成されたものである。共伴遺物はなく、付近から粗掘り中に縄文土器片は出土しているが、時代や性格は不明である。

2. 遺構外の出土遺物

(1) 土器(第11~13図、PL-5・6)

縄文時代前期・中期・後期・晩期の各時期の土器と、土師器が1点出土している。縄文土器の分類は時期別に行い、前期から順にそれぞれⅠ群・Ⅱ群・Ⅲ群・Ⅳ群とし、時期不明の粗製土器は一括してⅤ群とした。

(a) Ⅰ群土器(第11・12図 3・10~17、PL-5)

10は深鉢の口縁部破片である。口縁部文様は口縁端に平行する4条の側面圧痕文が施文され、文様帯は隆帯によって区画される。体部には、残存部分では横位のLR単節斜縄文が施文されている。15は10と同一個体の破片と思われる。11は口縁部付近の破片で、口縁部文様及び文様帯の区画は10と同様である。10・11・15は円筒下層d式期のものと思われる。3は鉢の底部、12~14・16・17は粗製深鉢の体部破片で、13は底部付近のものである。3には長さ6~7mmの爪跡のような刻みが見られるほかは、残存部は無文である。12には単節の斜縄文、13・16には縦位の結束第1種羽状縄文、14にはZ字状の連続文が見られる綾絡文、17にはLRの0段多条が施文されている。胎土には3・12~14・16・17とも繊維が含まれる。

(b) Ⅱ群土器(第12図 18~24、PL-5・6)

18は深鉢の体部破片で、S字状の連続文が見られる綾絡文が施文されている。前期の土器の可能性もあるが、円筒上層a・b式にも多く見られる施文で、胎土には粗砂が多く、繊維が含まれないのでⅡ群に分類した。19・20は深鉢の口縁部、21~24は体部破片である。19は貼付けによる隆帯と沈線で、20・21は沈線で区画される。区画された内部は19では横位のRL、20・21では斜位のLR単節斜縄文が施文されている。21の沈線や縄文は一部つぶされている。22・24も沈線と隆帯で区画され内部は単節斜縄文で施文されている。∩状のモチーフで区画されていると思われる。23はS字状の綾絡文が縦位に施文されている。18・23を除く各破片は中期末の大木9式ないし10式に相当すると思われる。

(c) Ⅲ群土器(第11・12図 5・7・25・26・27、PL-5・6)

5は口縁部と底部を欠くが、上部は口縁部に近い部分と思われる。器形は上部で若干外反する。体部上部には横走する2条の平行沈線とその下位に数mm間隔で連続する刺突列がある。地

文は横位のLR単節斜縄文である。7は底部を欠く。器形は体部中程にくびれを持ち、口縁部に向かって外傾する。口縁部および体部のくびれ部分には連続する刺突列がそれぞれ3列づつ横走する。また、体部の刺突痕が施されている部分には、残存部で2個の突起があるが本来は4個であったと思われる。地文は無文で器表の内外面はみがかれている。25は深鉢の口縁部破片で器表面をナデ調整した後、沈線で区画し、内部に縦位のLR単節斜縄文を施文している。文様のモチーフからは大木10式の可能性もあるが、器面の調整や胎土からは後期初頭と考えられ、Ⅲ群に入れた。26は体部の小破片で、地文にLR単節斜縄文を施し、その間を磨消して文様を構成している。

(d) **Ⅳ群土器** (第11・13図 9・27~29、PL-5・6)

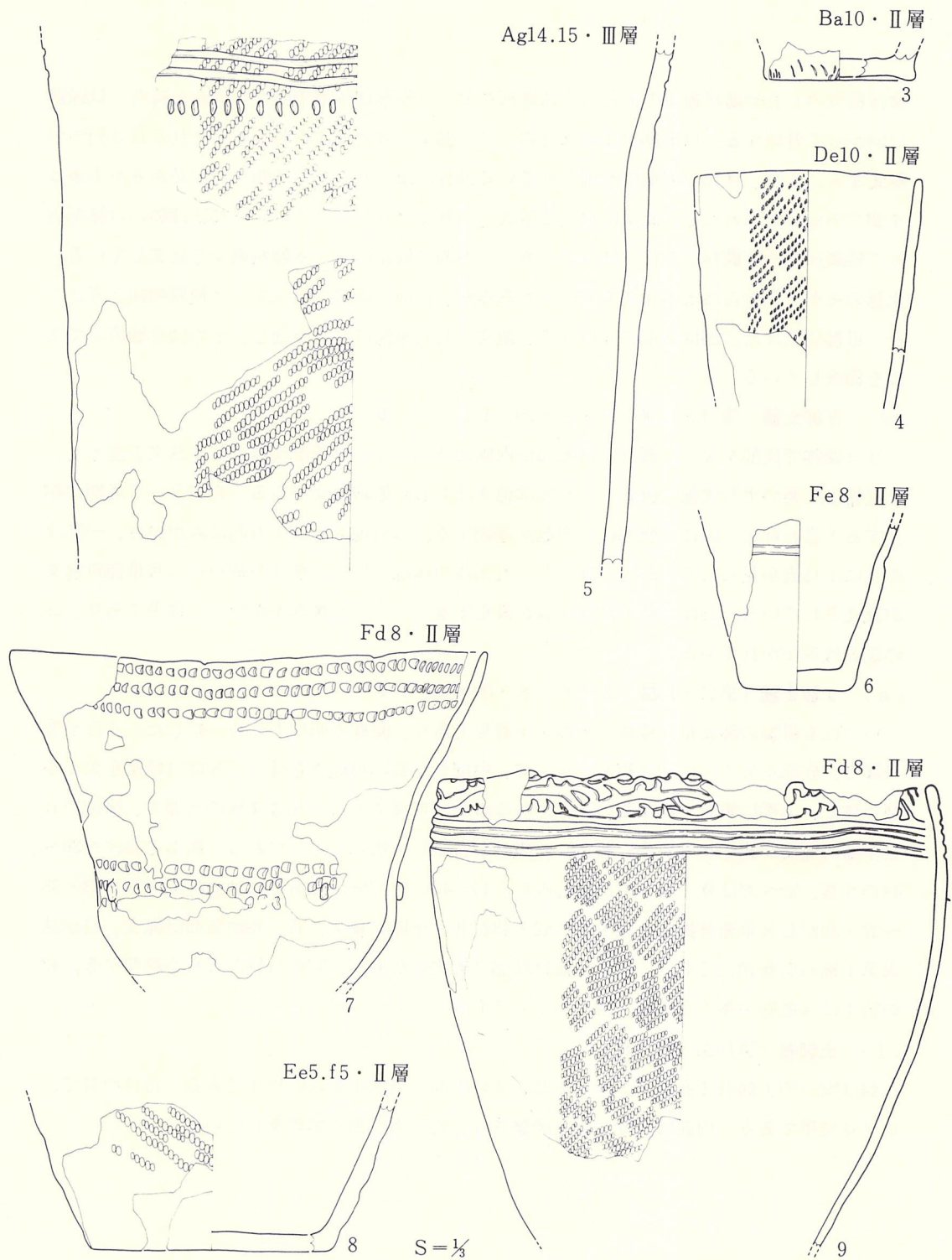
9は深鉢で底部を欠く。器形は口縁部が内側に湾曲する。口縁部文様はシダ状文を主とし、文様帯は2条の平行沈線で限られる。体部地文はLR単節斜縄文である。大洞B-C式期に相当すると思われる。27は口唇部に小突起が連続する。口唇部直下は横方向にみがかれ、一部沈線状に工具痕が見られる。28・29はどちらも深鉢の体部破片で、撚りの細かいLR単節斜縄文が施文されている。28は3条の平行沈線が横走する。どちらも焼きがかたく、薄手であり、29の裏面はみがかれている。

(e) **Ⅴ群土器** (第11・13図 4・6・8・30~43、PL-5・6)

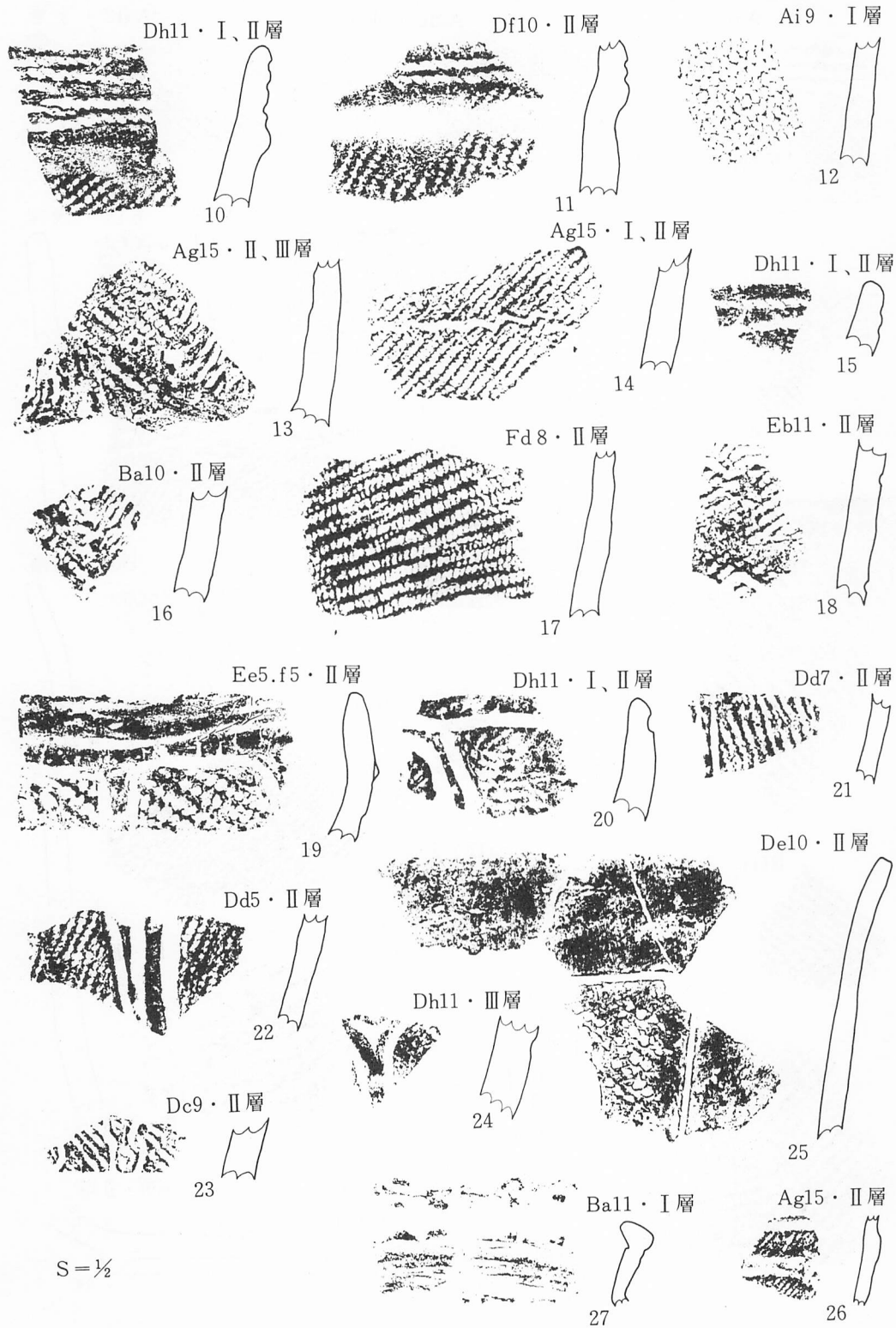
いずれも粗製の鉢または深鉢の土器・土器片であり、時期不明のものを一括した。4は小型の鉢で、底部を欠く。地文は複節斜縄文で、中期の土器の可能性を持つ。6は口縁部を欠く小型の鉢で、上部に横走する1条の沈線があるほかは無文である。8は深鉢の底部で、横位のRL単節斜縄文が施されている。胎土には粗砂が含まれ、粗いつくりである。拓本で掲げた30~43のうち、30~39は鉢・深鉢の口縁部破片、40~43は体部破片である。地文は30・31・33・35~37・39がLR単節斜縄文、34・40・42・43がRL単節斜縄文、32・38が無節斜縄文、41が結束第1種の羽状縄文である。30・34は口縁部に無文帯があり、35の口唇部はやや肥厚する。43の胎土には粗砂が多く含まれ、粗いつくりである。

(f) **土師器** (第13図 44、PL-6)

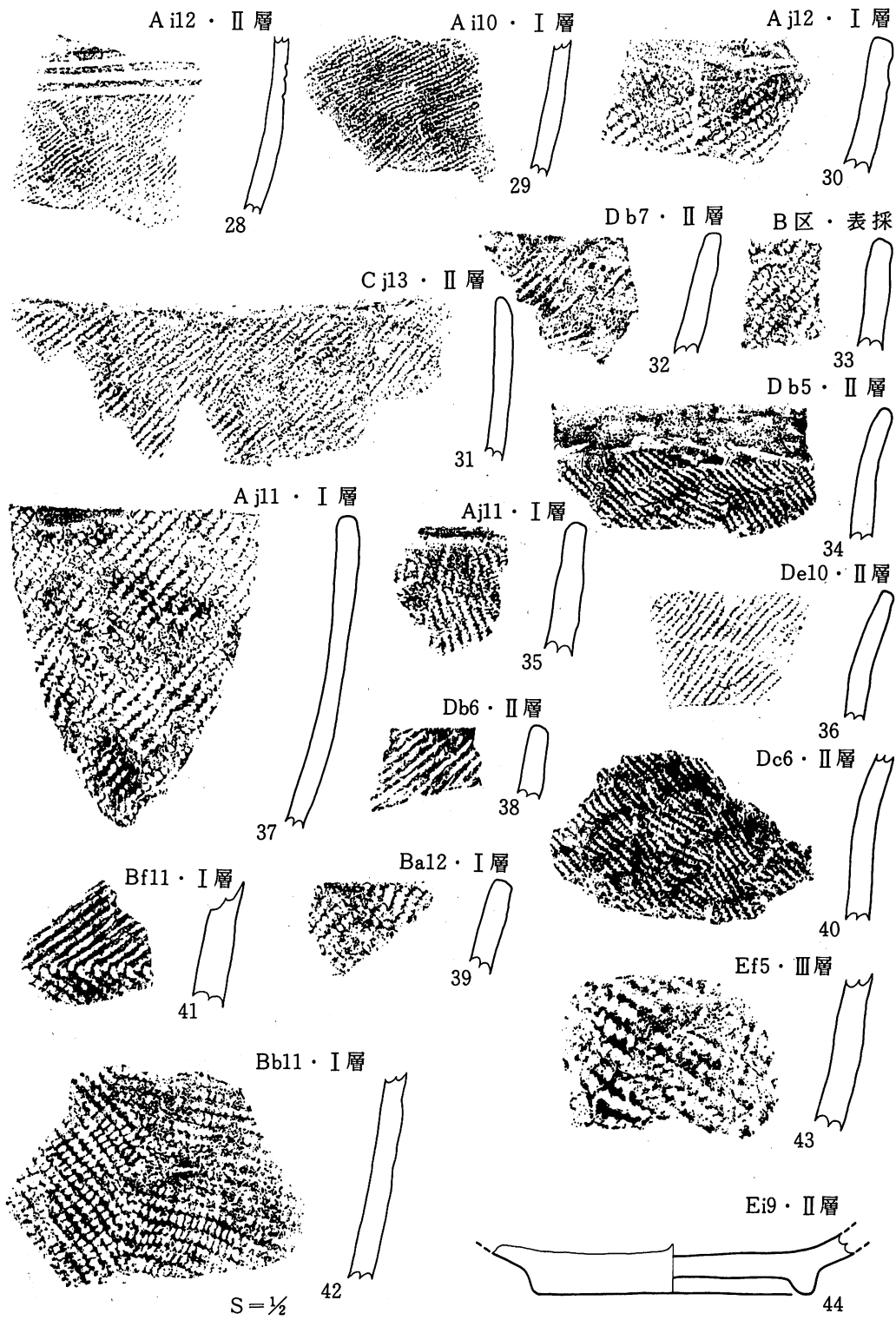
44は唯一の土師器である。グリッドEi9の沢筋の黒色土からの出土である。台付の坏で、ロクロ使用である。内面はヘラミガキ調整され、内外面に黒色処理をしている。



第11圖 遺構外出土遺物 土器(1)



第12圖 遺構外出土遺物 土器(2)



第13図 遺構外出土遺物 土器(3)

(2) 石 器

(a) 剝片石器 (第14図、45～55)

45は石鏃。無茎の凹基式石鏃である。両面加工され、先端部がわずかに欠損する。46・47は尖頭器に分類した。大きさは長さが共に35mm前後、幅22～25mmで、先端角が45の石鏃に比べて大きい。46は両面加工、47は周辺部のみの半両面加工で、共に完形品である。

48～52は不定形石器とした。48は半両面加工によって縁辺3か所に刃部を作り出している。1つは凸刃、もう1つは凹刃である。他の1つは剥離痕2mm以下の微細な調整を行っている。49は楕円形状を呈する剥片の片面縁辺のほぼ全周に、連続する二次加工によって刃部を作り出している。下端の刃部の角度は比較的急である。48は所謂削器・49は搔器の類である。48・49は連続する二次剥離によって刃部を作り出しているのに対し、50～52は部分的に二次剥離痕を持つ剥片である。50は側面に、51は下端部に、52は側面から下端部にかけて二次剥離痕が認められる。また、使用によるものか調整によるものか不明であるが、50・51・52とも1～2箇所の縁辺に微細な剥離痕が観察される。53～55はフレークであるが、鋭利な縁辺を持ち、縁辺の1/2以上に50等に見られた微細な剥離痕が観察される。痕跡の大きさはすべて2mm以下である。

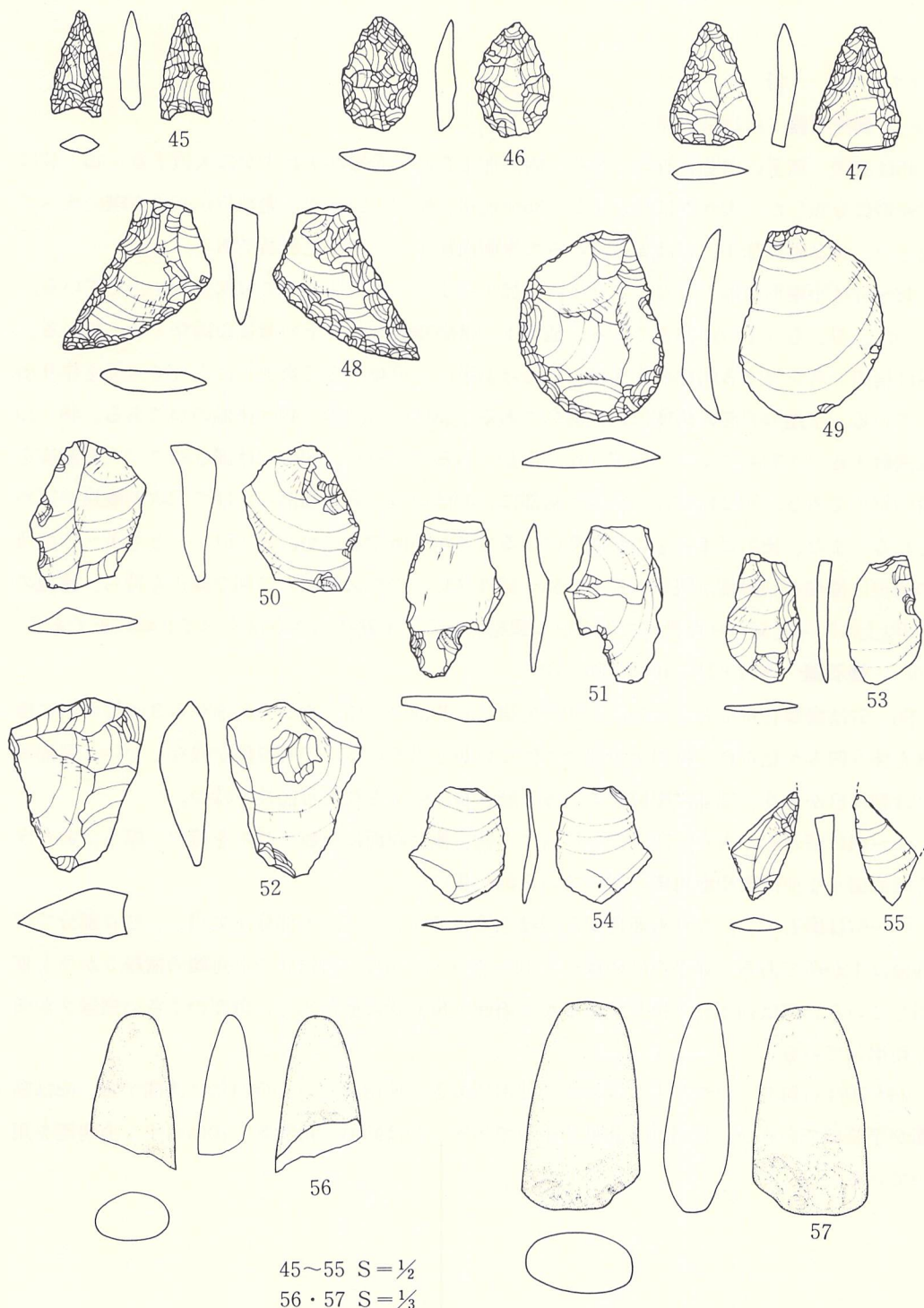
(b) 礫石器 (第14・15・16図、56～70)

56・57は磨製石斧である。56は刃部が欠損し、基部のみ残存する。基端から3cm程の所に擦痕を伴う凹みが見られ、柄の装着部分ではないかと思われる。57も刃部が残存しない。刃部側には剥落痕があり、端部は摩滅している。敲き石に転用された可能性を持つ。

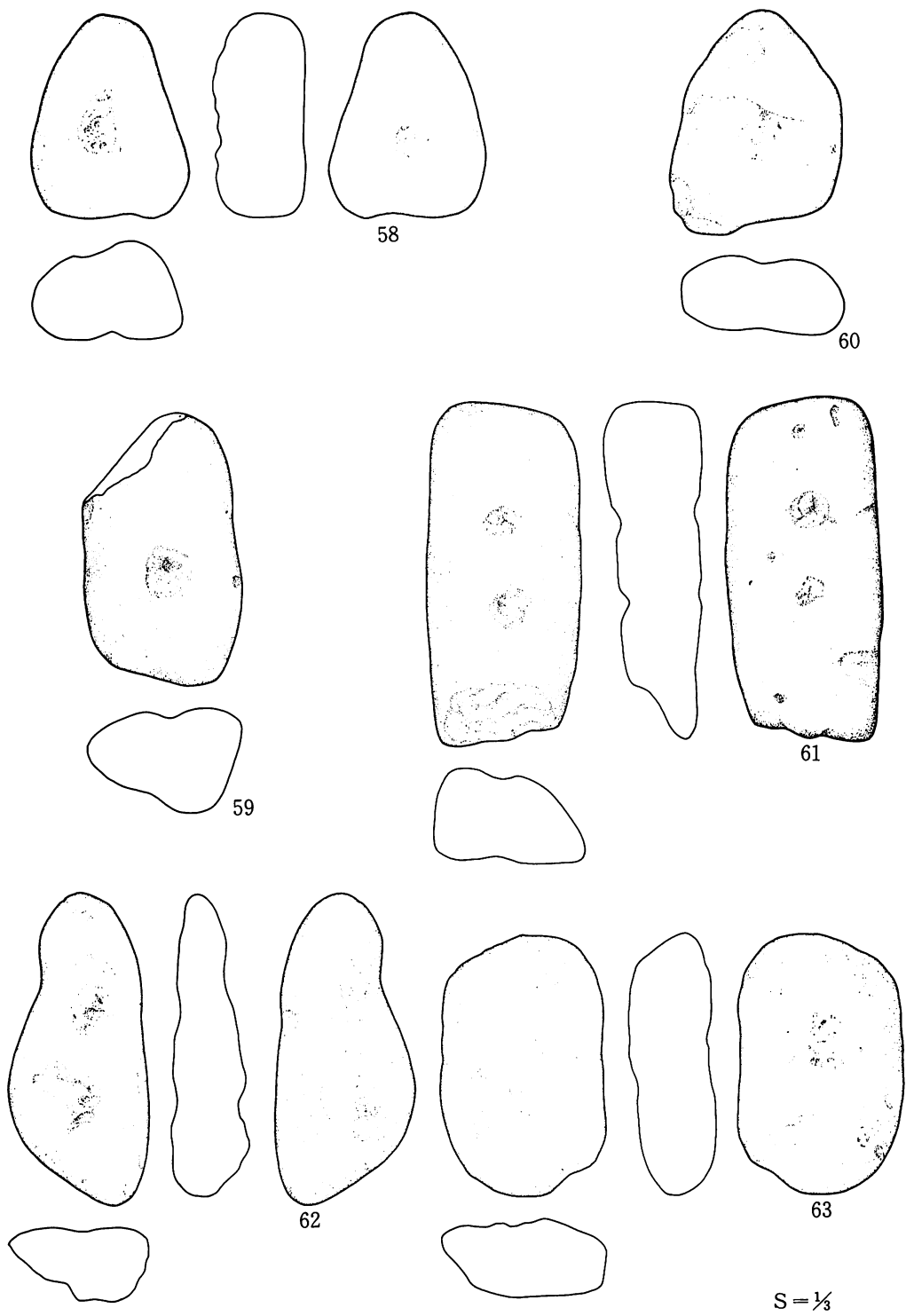
58～64は凹み石である。59・60は片面に1個、他は両面に複数の凹みを持つ。厚さはあるが比較的扁平な亜円礫や亜角礫を用いている例が多い。

65～67は磨石で、いずれも亜角礫の側縁を用いている。65は大部分が欠損し、残存部分での磨面は1か所である。扁平な礫の縁辺を用いている。66は三角錐状の亜角礫の側縁3か所を使用している。67は約半分欠損しているが、断面三角形の亜角礫で、角度の小さい側縁2か所を使用している。

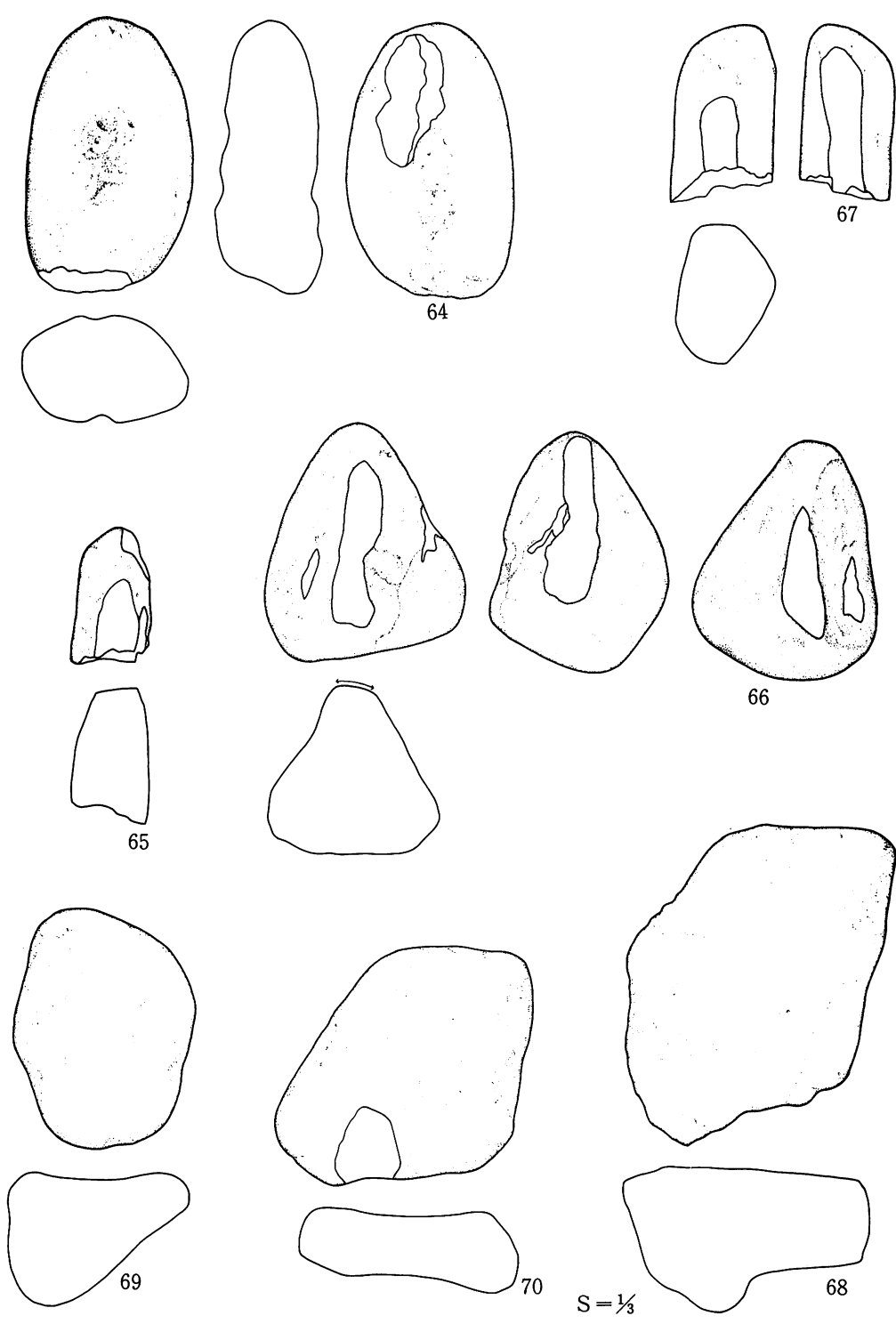
68～70は石皿で、いずれも1面のみを使用である。使用面はいく分凹状に湾曲する。68は断面が不整形であるが、使用面は比較的平坦である。69は断面三角形、70は扁平な亜角礫を用いている。



第14図 遺構外出土遺物 石器(1)



第15図 遺構外出土遺物 石器(2)



第16図 遺構外出土遺物 石器(3)

第2表 石器計測一覧表

図版一番号	出土地点層位	器種	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	石質	産地
14 - 45	D c 5 II層	石 鏃	31.2	15.8	5.8	2.3	珪質泥岩	牟石西部新第三系中新統
14 - 46	A g 15I・II "	尖 頭 器	33.0	21.7	6.6	5.0	"	" "
14 - 47	A h 15 III	"	35.7	25.3	6.0	4.7	"	" "
14 - 48	E b 11 II	不定形石器	44.5	31.5	7.5	10.8	"	" "
14 - 49	D b 7 II	"	51.0	42.0	8.5	22.2	"	" "
14 - 50	E c 10 I	"	42.5	33.0	11.0	8.4	"	" "
14 - 51	C f 14 II	"	47.0	28.5	7.5	7.9	"	" "
14 - 52	A h 15 III	"	51.0	48.5	14.0	25.3	珪質粘板岩	北上山地古生界
14 - 53	A g 15 II・III	微細な剝離痕を持つ剥片	37.5	21.5	4.0	2.9	珪質泥岩	牟石西部新第三系中新統
14 - 54	A g 15 II・III	"	35.5	28.5	3.5	2.5	"	" "
14 - 55	A h 15 III	"	33.0	16.5	5.5	1.9	"	" "
14 - 56	E a 11 I	磨製石斧	(70.0)	(37.0)	(23.0)	(82)	輝石安山岩	奥羽山地新第三系?
14 - 57	E d 10 I	"	(93.0)	(52.0)	(29.0)	(210)	チャート質 淡緑色凝灰岩	北上山地古生界
15 - 58	A h 10 I	凹 石	92.0	70.5	44.5	395	輝石安山岩	奥羽山地新第三系?
15 - 59	B d 10 I	"	123.5	72.0	46.5	528	"	" "
15 - 60	B f 10 I	"	101.0	76.5	34.0	370	"	" "
15 - 61	B f 10 II	"	156.5	70.0	44.0	690	"	" "
15 - 62	B g 13 II	"	141.0	63.0	33.5	320	"	" "
15 - 63	C d 6 II	"	118.5	74.0	37.5	450	"	" "
16 - 64	D j 11 II	"	123.5	75.5	48.5	598	"	" "
16 - 65	C i 12 II	磨 石	(62.5)	(35.0)	(60.5)	(170)	"	" "
16 - 66	E f 9 I	"	108.5	91.0	76.0	640	"	" "
16 - 67	F d 7 II	"	(79.0)	45.5	52.5	(290)	"	" "
16 - 68	B d 12 II	石 皿	145.5	113.5	65.0	1195	"	" "
16 - 69	B e 12 II	"	107.5	81.0	58.0	580	"	" "
16 - 70	D g 11 II	"	108.0	107.5	36.0	610	"	" "

※()内の値は現存値

V ま と め

遺構については、検出数も少なく、性格や時期決定の資料を欠く。以下に、時期を推定できる要因について若干述べて遺構のまとめとする。

住居状竪穴遺構・ピットはⅣ層上面での検出であるが、Ⅱ・Ⅲ層を欠く地点なので、検出面での時期の推定はできない。1号ピットからは縄文時代晩期の土器片が埋土中から出土しているが、遺構の時期としては上限と考えるのが妥当であろう。2号ピットには十和田a降下火山灰と推定される浮石が埋土中に含まれるが、再堆積と考えられるので降下以後の遺構であろう。住居状竪穴遺構の埋土は混土が卓越し、その様相からは比較的新しい時期の遺構のように思われる。1号焼土は焼土中から縄文時代前期の土器が出土しており、焼土上位のⅡ層には攪乱等が見られないことから、縄文時代の遺構の可能性はある。2号焼土も1号焼土と同じくⅢ層が焼成を受けているが、この付近は表土が薄く、Ⅱ層土は表土（耕作土）との識別が困難な為、縄文時代の遺構と言えるかどうか不明である。

遺物については、縄文時代前期から晩期までの各時期の土器片と土師器1点、それに少量の石器が出土している。土器の出土状況は、調査区斜面上方部のA・B区では表土中、下方部のD・E区では沢筋等に堆積するⅡ層の黒色土中からのものが多い。黒色土中からの遺物は流れ込みによるものであろう。各時期の土器片とも出土量は少ない。石器は26点のうち剥片石器は11点と少なく、他は礫石器である。

遺物の出土状況から、調査区西側から南側にかけての丘陵地には縄文時代の遺構が存在する可能性がある。

《引用・参考文献》

- 岩手県企画開発室 1975年 『土地分類基本調査』 沼宮内
- 小田島禄郎 1924年 「県下に於ける竪穴及「チャシ」に関するもの其一」『史蹟名勝天然記念物調査報告4』 岩手県
- 小田島禄郎 1925年 「県北における古墳の2・3」『史蹟名勝天然記念物調査報告6』 岩手県
- 笠原信男・茂木好光 1986年 『田柄貝塚Ⅱ』 宮城県文化財調査報告書第111集
- 片方宗明・光井文行 1985年 『荒木田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第92集
- 草間俊一 1961年 「岩手県西根村谷助平古墳」『岩手大学学芸学部研究年報第18巻』 岩手大学
- 高橋昭治 1975年 『北上川上流地域の考古学資料』 北進考古学資料室
- 高橋与右ヱ門 1986年 『西根町史』 第一編先史時代 西根町史編纂委員会
- 高橋与右ヱ門・大原一則 1984年 『上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第71集

写真図版



近景（東から）

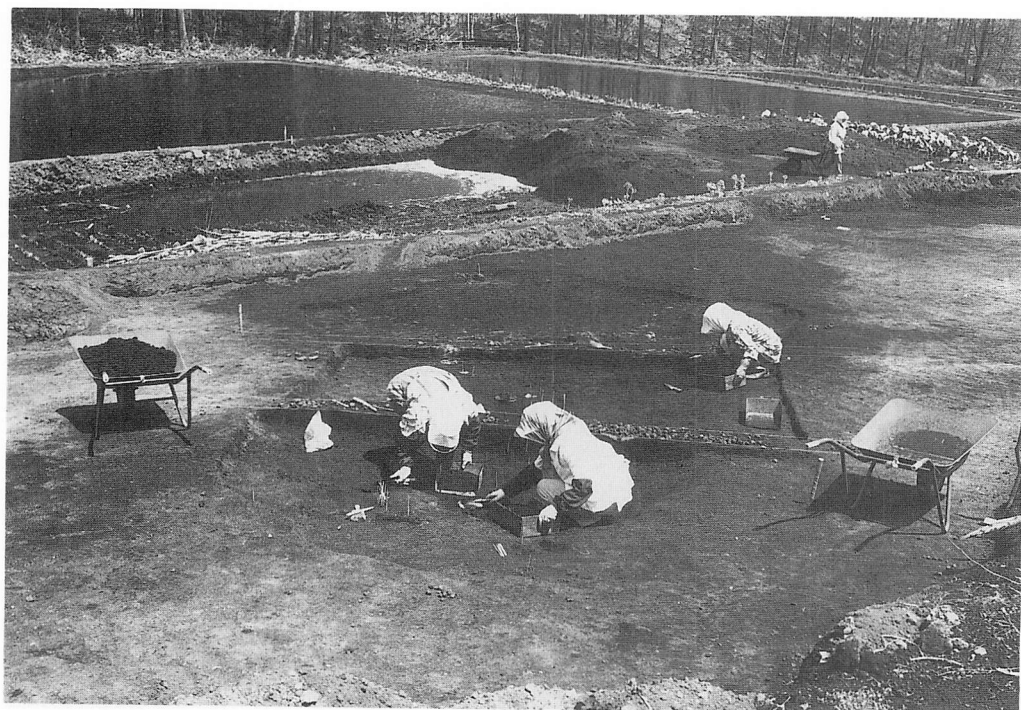


遠景（東から）

PL-1 遺跡近景・遠景



粗掘り

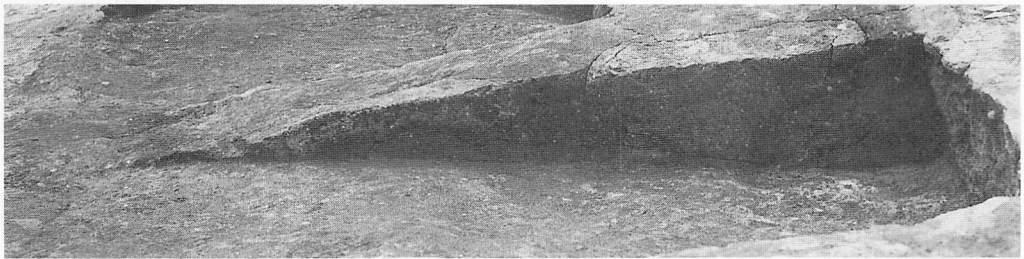


精査

PL-2 作業風景



(全景)



住居状竖穴遺構

(断面)



(平面)

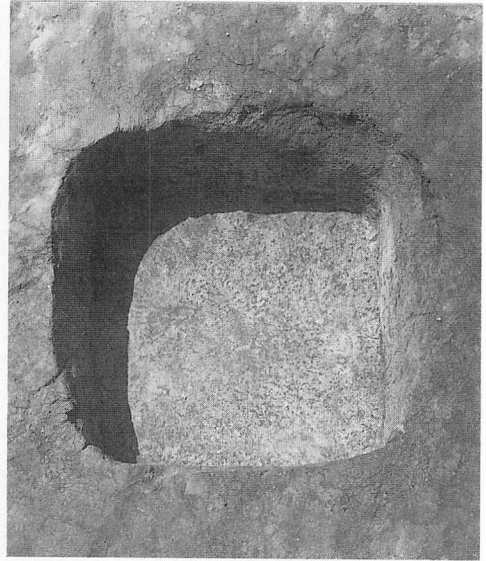


(断面)

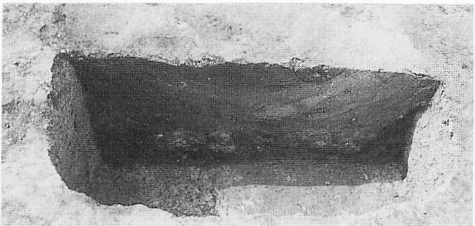
1号ピット
PL-3 遺構(1)



(検出状況)



(平面)

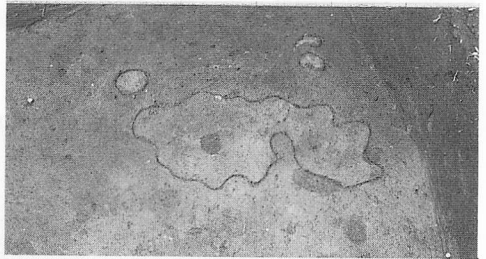


(断面)

2号ピット



(平面)

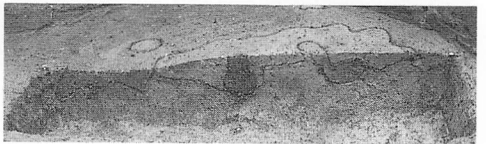


(平面)



(断面)

2号焼土



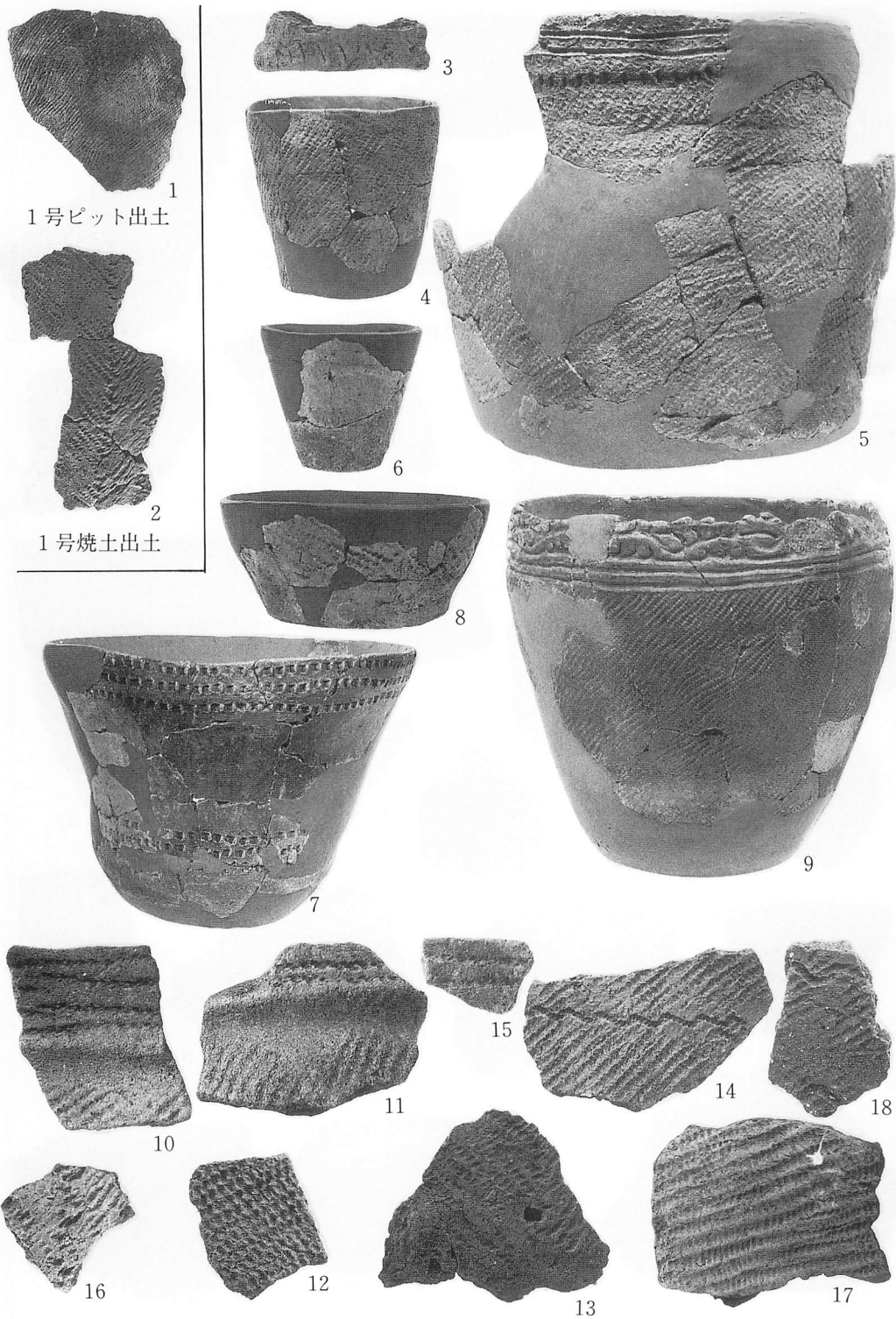
(断面)

1号焼土

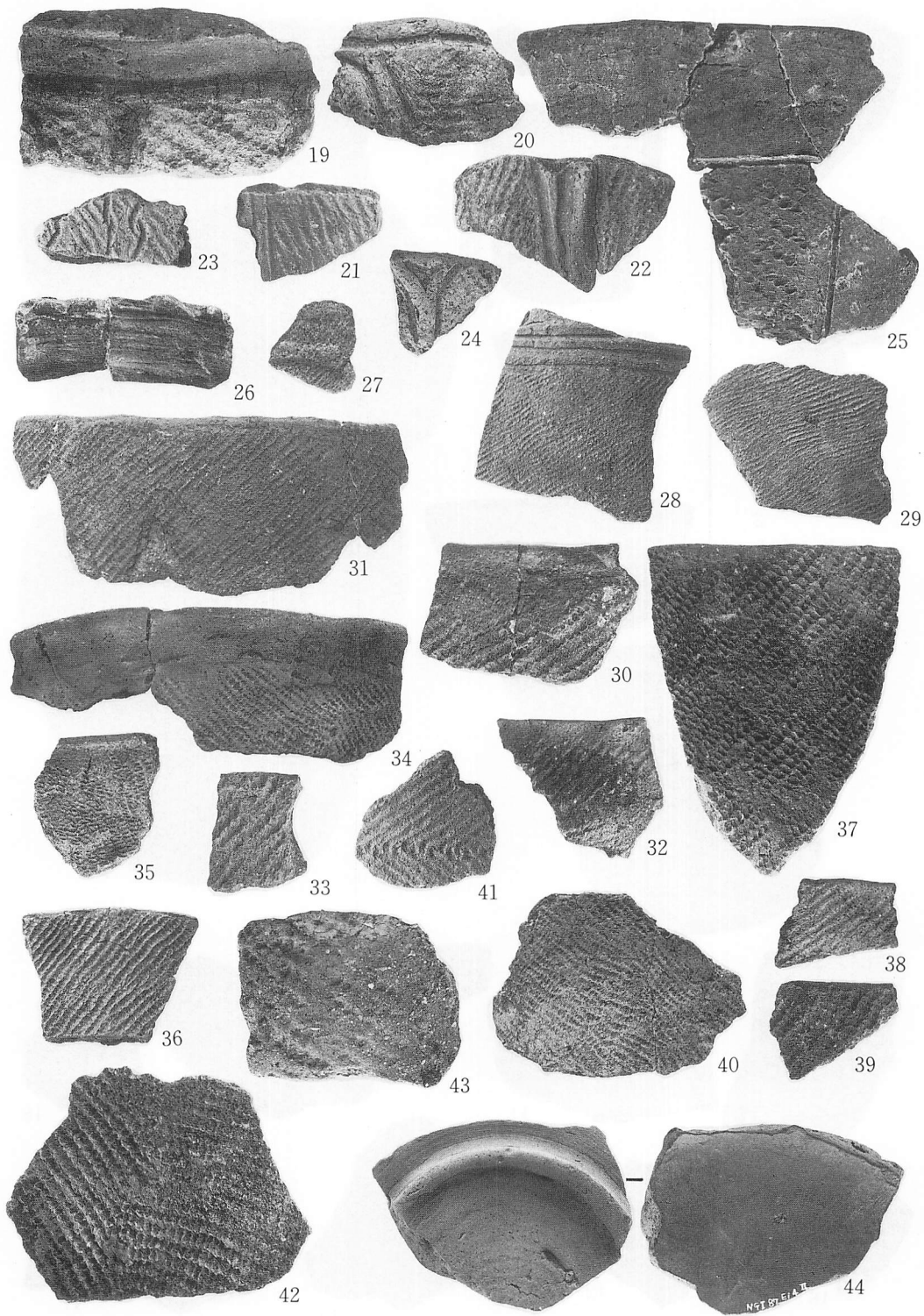


基本層序

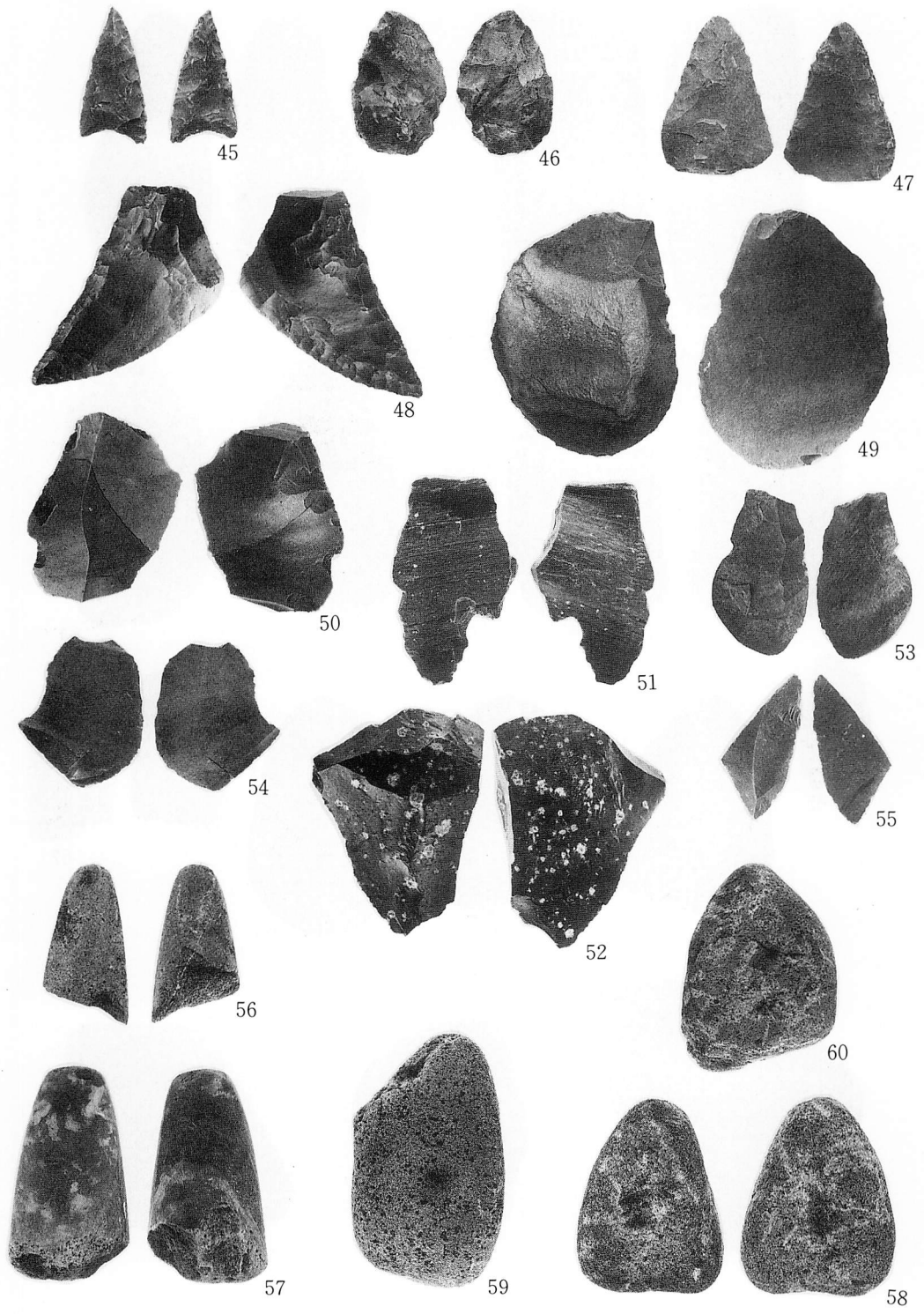
PL-4 遺構(2)・基本層序



PL-5 遺構内・遺構外出土遺物 土器(1)



PL-6 遺構外出土遺物 土器(2)



PL-7 遺構外出土遺物 石器(1)



PL-8 遺構外出土遺物 石器(2)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	及 川 昌 二
副 所 長	鎌 田 良 悦
〔管 理 課〕	
課 長 (兼)	鎌 田 良 悦
課 長 補 佐	伊 藤 吉 郎
主 事	阿 部 隆 広
嘱 託	似 内 喜 兵
運転技士兼技能員	佐 藤 春 男
〔調 査 課〕	
課 長	昆 野 靖
主任文化財専門調査員	三 浦 謙 一
〃	工 藤 利 幸
〃	高橋 与右 ^エ 門
〃	田 鎖 寿 夫
〃	佐々木 嘉 直
〃	平 井 進
〃	中 村 良 一
〃	中 川 重 紀
文化財専門調査員	光 井 文 行
〃	佐 瀬 隆
〃	玉 川 英 喜
〃	斎 藤 博 司
〃	東海林 隆 幹
〃	遠 藤 修
〃	斎 藤 邦 雄
〃	高 橋 義 介
〃	酒 井 宗 孝
〔資 料 課〕	
課 長	新 田 和 雄
主任文化財専門調査員	小田野 哲 憲

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第128集

野口 I 遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業岩手地区関連遺跡発掘調査

印刷 昭和63年5月20日

発行 昭和63年5月25日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001・9002

印刷 株式会社 吉田印刷

〒020 盛岡市名須川町23番27号

電話 (0196) 25-2323